

(品目別需給編)

1 小麦

(1) 国際的な小麦需給の概要（詳細は右表を参照）

<米国農務省（USDA）の見通し>

2022/23 年度

生産量 前年度比 前月比

- ・サウジアラビア等で下方修正されたものの、エチオピア等で上方修正され、前月から上方修正された。史上最高の見込み。

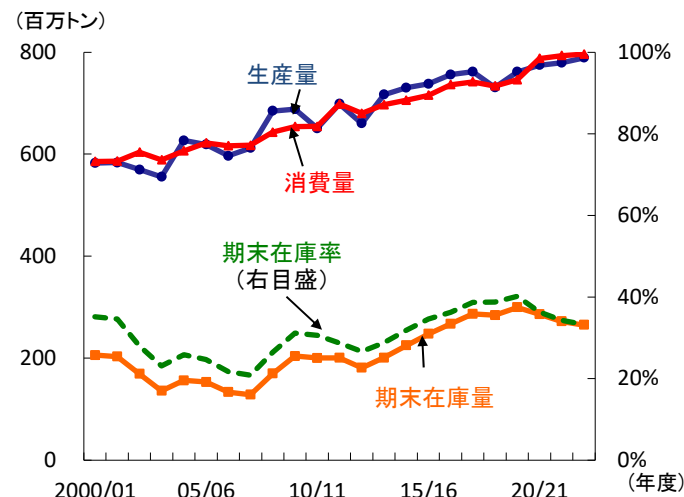
消費量 前年度比 前月比

- ・ロシア、インドネシア等で下方修正されたものの、インド、中国、EU 等で上方修正され、前月から上方修正された。史上最高の見込み。

輸出量 前年度比 前月比

- ・ロシア、ウクライナ等で上方修正されたものの、EU、アルゼンチン等で下方修正され、前月から下方修正された。依然として、史上最高の見込み。

期末在庫量 前年度比 前月比



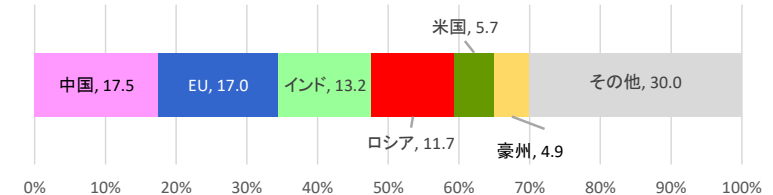
◎世界の小麦需給

(単位: 百万トン)

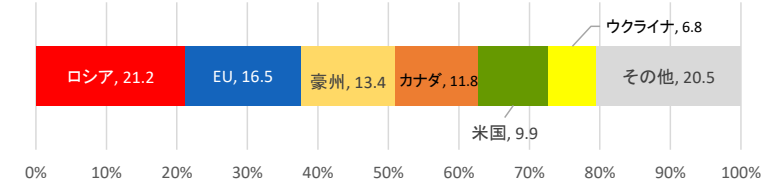
年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23		
			予測値	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	774.4	779.1	789.0	0.1	1.3
消 費 量	787.7	793.4	796.1	2.9	0.3
うち飼料用	163.7	161.5	160.3	1.8	▲ 0.7
輸 出 量	203.4	202.9	212.7	▲ 1.2	4.8
輸 入 量	194.8	199.2	206.3	▲ 2.1	3.5
期末在庫量	286.3	272.1	265.1	▲ 2.1	▲ 2.6
期末在庫率	36.3%	34.3%	33.3%	▲ 0.4	▲ 1.0

資料: USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」 (11 April 2023)

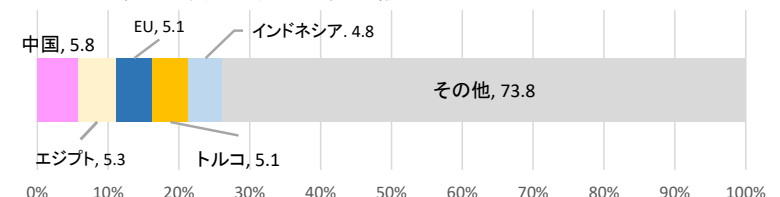
○ 2022/23年度の世界の小麦の生産量(789.0百万トン)(単位: %)



○ 2022/23年度の世界の小麦の輸出量(212.7百万トン)(単位: %)



○ 2022/23年度の世界の小麦の輸入量(206.3百万トン)(単位: %)



(2) 国別の小麦の需給動向

＜ 米国 ＞ 2023/24 年度の小麦の作付意向面積は前年度比 9 %増加

【生育・生産状況】米国農務省(USDA)によれば、2022/23 年度の実生産量は、前月予測からの変更はなく 44.9 百万トン。前年度に比べ 0.2%増加したものの、2003/04 年度以降で 2021/22 年度に次ぐ低水準。種類別には冬小麦が 30.0 百万トン、春小麦が 13.1 百万トン、デュラム小麦が 1.7 百万トン。

同「Prospective Plantings」(2023.3.31)によれば、2023/24 年度の小麦の作付意向面積は、20.18 百万ヘクタール(前年度比 9.0%増)。種類別では、冬小麦が 15.18 百万ヘクタール(同 12.8%増)、デュラム小麦が 0.72 百万ヘクタール(同 9.1%増)、春小麦が 4.28 百万ヘクタール(同 2.3%減)。冬小麦は、価格水準が高く収益が見込めることから、「Winter Wheat and Canola Seedings」(2023.1.12)の予想面積(14.95 百万ヘクタール)から 2 %上方修正され、2017/18 年度以降最高となる見込み。

同「Wheat Outlook」(2023.4.13)によれば、冬小麦の生産地では、依然として干ばつの影響が懸念されている。干ばつ地域にある冬小麦生産地の割合は、前年 11 月には約 75%に高まったが、ここ数か月でその割合は減少し、4 月 4 日現在、48% (前年度同時期 69%) となった。一方で、評価基準で最も厳しい「例外的な干ばつ」とされた地域にある小麦の作付面積の割合は 15%(前年度同時期 2%)と前年度に比べ増加している。

「Crop Progress」(2023.4.18)によれば、冬小麦の作柄評価(やや良い～良)は 27%と前年度(30%)に比べ 3 ポイント減少し、最も低かった 1996 年と並んでいる。州別には、テキサス州、モンタナ州では前年度より改善しているものの、干ばつが継続している影響でカンザス州、オクラホマ州等で作柄評価は悪化している。なお、現在の作柄評価と最終の単収との相関関係は限定的で、今後の天候が単収を決める重要な要因となる。

また、春小麦の作付けが開始されているものの、主要生産 6 州の作付進捗率は低温や積雪により作業が限定的なことから、3 %と前年度同時期の 8 %、過去 5 年平均の 7 %を下回っている。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2022/23 年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、21.1 百万トンの見込み。他の主要輸出国に比べ輸出競争力が弱いいため、1972/73 年度以降最低の水準となる見込み。2022 年 6 月から 2023 年 3 月までの累計輸出量は、ほぼ前年度並みで過去 5 年平均を下回っている。2023 年 3 月の輸出先国は、メキシコ(18.5%)、中国(17.6%)、フィリピン(13.6%)の順。

小麦一米国(冬小麦が全体の 7 割、春小麦は 3 割)

(単位:百万トン)

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23 (22年6月～23年5月)		
			予測値	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生産量	49.8	44.8	44.9	-	0.2
消費量	30.4	29.6	29.9	▲ 0.7	1.1
うち飼料用	2.5	1.6	1.5	▲ 0.7	▲ 6.3
輸 出 量	27.1	21.8	21.1	-	▲ 3.2
輸 入 量	2.7	2.6	3.4	0.1	31.3
期末在庫量	23.0	19.0	16.3	0.8	▲ 14.4
期末在庫率	40.0%	37.0%	31.9%	2.0	▲ 5.1
(参考)					
収穫面積(百万ha)	14.89	15.03	14.36	-	▲ 4.5
単収(t/ha)	3.34	2.98	3.13	-	5.0

資料: USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」
「World Agricultural Production」(11 April 2023)

図:米国产小麦の作付面積の推移(2012/13～2023/24 年度)

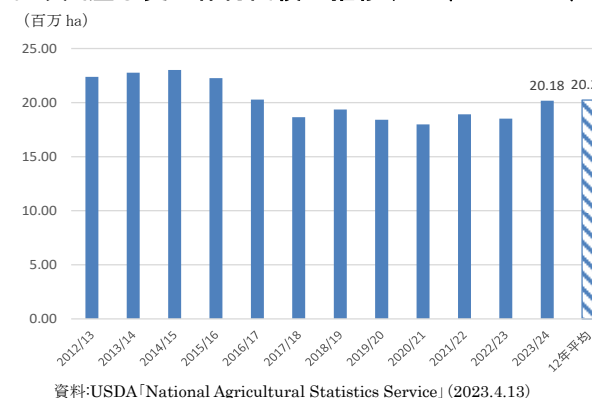
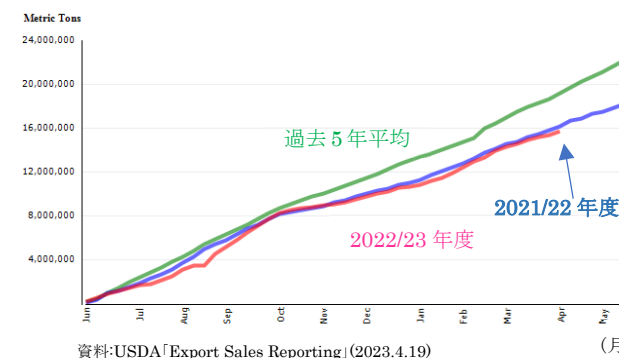


図:米国产小麦の輸出量の推移



＜ カナダ ＞ 2022/23 年度の春小麦・デュラム小麦の品質は良好

【生育・生産状況】カナダ農務農産食品省(AAFC)「Outlook for Principal Field Crops」(2023.4.21)によれば、2022/23 年度の小麦全体の生産量は、前月予測からの変更はなく、33.8 百万トン(前年度比 50.8%増、過去 5 年平均比 10.3%増)の見込み。品種別の生産量は、普通小麦が 28.4 百万トン、デュラム小麦が 5.4 百万トン。それぞれ干ばつの影響を受けた前年度から、収穫面積及び単収が増加した。

カナダ穀物委員会(Canadian Grain Commission: CGC)によれば、普通小麦及びデュラム小麦の品質は非常に良好で、それぞれ 93%、81%が 1、2 等に格付けされた。また、タンパク質含有量は、普通小麦は平均以上の 13.8%、デュラム小麦は平均レベルの 13.7%に回復した。

また、AAFC によれば、2023/24 年度の小麦全体の生産量は、平年並みの天候に恵まれれば、前年度に比べ 1.5 %増の 34.3 百万トン。そのうち、普通小麦は播種面積が増加することから、同 1.8%増の 28.9 百万トン、デュラム小麦は、播種面積が他の作物の作付けへのシフトにより減少するものの、単収が上昇し、同 0.1%増の 5.4 百万トン。なお、生産量予測は、作付意向調査の結果をもとに 5 月に更新される。

USDA によれば、小麦主要生産地の平原 3 州では、低温に見舞われている他、3 月 31 日現在 83%が干ばつ状況にあり、小麦の播種、初期成育には融雪と今後の降雨が必要とされている。

【貿易情報・その他】AAFC によれば、2022/23 年度の小麦全体の輸出量は、前月予測から 0.1 百万トン上方修正され、前年度に比べ 61.2%増加の 24.4 百万トン。そのうち、普通小麦は好調な輸出ペースが継続しているため、前月予測から 0.1 百万トン上方修正され、前年度に比べ 58.9%増加の 19.6 百万トンとなる見込み。また、デュラム小麦は、前月予測からの変更はなく、前年度に比べ 76.7%増加の 4.8 百万トンの見込み。

CGC によれば、2022 年 8 月～2023 年 2 月の輸出量は、普通小麦が 11.6 百万トン、デュラム小麦が 3.2 百万トンの計 14.8 百万トン。種類別の輸出先国は、普通小麦は中国(19%)、インドネシア(7%)、日本(7%)の順で、アジア向けが多い。デュラム小麦は、イタリア(32%)、アルジェリア(16%)、モロッコ(15%)の順で、イタリアや北アフリカ向けが多い。

また、AAFC によれば、2023/24 年度の輸出量は、前年度に比べ 1.6%減の 24.0 百万トンの見込みで、普通小麦が前年度と変わらず 19.6 百万トン、デュラム小麦は、欧州、米国との競合から減少が見込まれ、同 8.3%減少の 4.4 百万トンの見込み。

小麦－カナダ（春小麦を主に栽培）

(単位：百万トン)

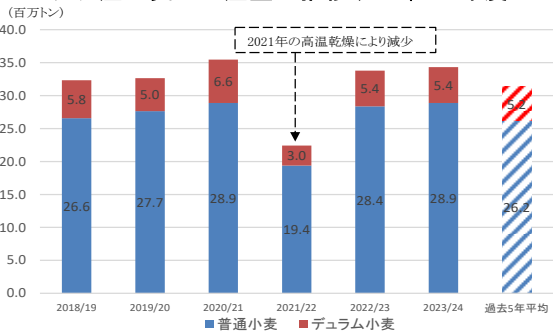
年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23 (22年8月～23年7月)		
			予測値、() は AAFC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生産量	35.4	22.4	33.8 (33.8)	-	50.8
消費量	9.1	10.2	9.6 (8.9)	-	▲ 5.9
うち飼料用	4.2	5.2	4.5 (4.5)	-	▲ 12.6
輸出量	26.4	15.1	25.0 (24.4)	-	65.3
輸入量	0.6	0.6	0.6 (0.1)	-	9.1
期末在庫量	6.0	3.7	3.5 (4.3)	-	▲ 3.3
期末在庫率	16.7%	14.5%	10.2% (12.9%)	-	▲ 4.2
(参考)					
収穫面積(百万ha)	10.02	9.20	10.08 (10.08)	-	9.6
単収(t/ha)	3.54	2.44	3.35 (3.35)	-	37.3

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、

「World Agricultural Production」(11 April 2023)

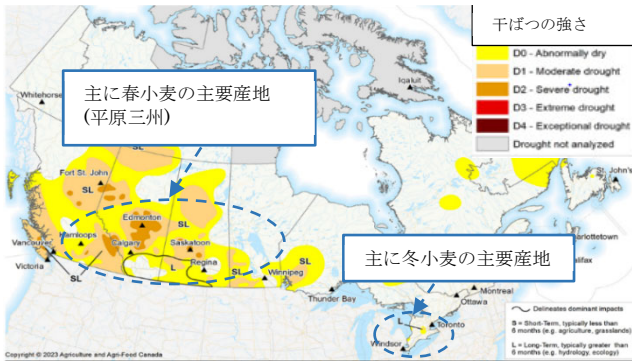
AAFC 「Outlook For Principal Field Crops」(21 April 2023)

図 カナダ産小麦の生産量の推移 (2017/18 年度～2023/24 年



資料:AAFC 「OUTLOOK FOR PRINCIPAL FIELD CROPS」(2023.4.21)

図 カナダの干ばつ状況 (2023 年 3 月 31 日現在)



資料:AAFC 「Canadian Drought Monitor」(2023.3.31)

＜ 豪州 ＞2022/23 年度の生産量は史上最高の 39.0 百万トン

【生育・生産状況】USDA によれば、2022/23 年度の実生産量は、前月予測からの変更はなく、39.0 百万トンと前年度の 36.2 百万トンを 7.6% 上回り、史上最高の見込み。

豪州農業資源経済科学局(ABARES)「Australian Crop Report」(2023.3.7)によれば、2022/23 年度の実生産量は史上最高の 39.2 百万トンの見込み。

主要生産州では、ウェスタンオーストラリア州(WA 州)の実生産量は、良好な天候に恵まれたことから、史上最高であった前年度を 7% 上回る 13.8 百万トン(過去 5 年平均比 52.6% 増)の見込み。なお、春の低温により、タンパク質含有量が昨年より低い水準となった。また、ニューサウスウェールズ州(NSW 州)の実生産量は、10.3 百万トンと前年度を 15% 下回るものの、過去 5 年平均を 53.9% 上回る見込み。懸念された洪水による品質への影響は、例年に比べ、同州中部及び南部で低タンパク質の小麦の割合が増加したものの、同州北部では高タンパク質含有量の小麦の割合は例年並みとなった。

豪州の小麦の作付けは、例年 4 月中旬から開始され 5 月にほぼ終了する。2023/24 年度の作付け前の 4 月半ば、小麦生産地域全体でにわか雨が多くなり、サウスオーストラリア州、WA 州では作付け前の土壌に水分が供給された。このため、地中の土壌水分量は平均値を上回っている。

なお、豪州気象局によれば、2022 年に記録的な降雨をもたらしたラニーニャ現象は終息し、乾燥天候となるエルニーニョが発生する可能性がある。ABARES「Agricultural commodities」(2023.3.7)によれば、乾燥天候になった場合、2023/24 年度の実生産量は 28.2 百万トンと前年度に比べ減少する見込み。

GIWA(ウェスタンオーストラリア州穀物団体)(2023.4.7)によれば、大麦価格が引き続き上昇しない限り、ここ数年続いた大麦から小麦へのシフトは 2023/24 年度も継続すると見られている。

【貿易情報・その他】USDA によれば、4 月 5 日現在の豪州産の輸出価格(FOB)は、韓国と東南アジアにおける飼料用小麦の需要減退により、3 月 3 日から 10 ドル/トン低下し、329 ドル/トン。

2022/23 年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、豊富な輸出余力から、史上最高の 28.5 百万トンとなる見込み。豪州産の輸出小麦は、豪州東部(NSW 州等)での生育期後半の降雨で品質が低下したため、輸出量に占める飼料用グレードの小麦の割合が平年以上となった。豪州は、主要なアジア市場に地理的に近く他の主要輸出国に比べ輸送コストが低いため、飼料グレード小麦を含むオーストラリア産小麦に対する東南アジアおよび東アジアからの需要は強い。

小麦－豪州(冬小麦を主に栽培)

(単位: 百万トン)

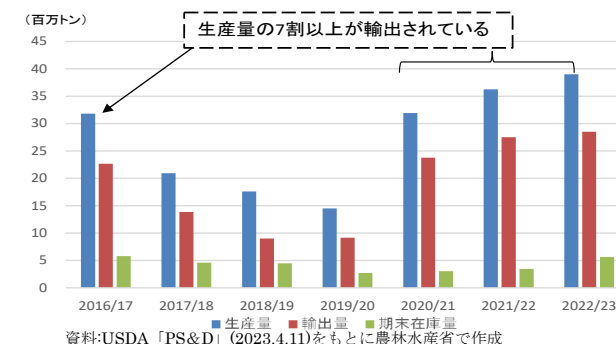
年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23(22年10月～23年9月)		
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	31.9	36.2	39.0 (29.3)	-	7.6
消 費 量	8.0	8.5	8.5 (7.8)	-	▲ 0.4
うち飼料用	4.5	5.0	5.0 (4.2)	-	-
輸 出 量	23.8	27.5	28.5 (19.4)	-	3.6
輸 入 量	0.2	0.2	0.2 (0.3)	-	▲ 4.8
期末在庫量	3.0	3.4	5.6 (5.9)	-	64.1
期末在庫率	9.5%	9.5%	15.2% (21.6%)	-	5.7

(参考)

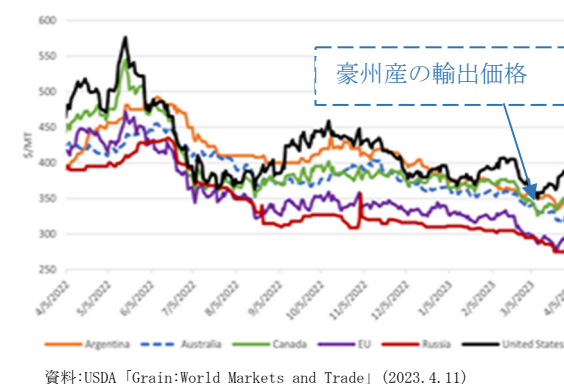
収穫面積(百万ha)	12.64	12.73	13.00 (13.0)	-	2.1
単収(t/ha)	2.52	2.85	3.00 (3.00)	-	5.3

資料: USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(11 April 2023)
IGC 「Grain Market Report」(16 March 2023)

図：豪州の生産量、輸出量、期末在庫量の推移



図：小麦主要輸出国の輸出価格(FOB)の推移



< EU27 > 2022/23 年度の輸出量はロシア等との競合により下方修正

【生育・生産状況】欧州委員会(2023.3.30)によれば、EU27 の 2022/23 年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、前年度に比べ 2.9%減少の 134.1 百万トンの見込み。そのうち、普通小麦、デュラム小麦の生産量は、それぞれ 126.9 百万トン、7.1 百万トンの見込み。また、前年度に比べると、普通小麦は全体で 2.4%減少し、国別には、主にポーランドで 10.4%、ドイツで 5.2%増加したものの、スペインで 27.7%、ルーマニアで 12.1%、フランスで 4.9%減少した。一方、デュラム小麦は全体で 11.4%減少し、国別には、主にフランスで 15.9%、イタリアで 9.2%減少した。

2023/24 年度の実産量は、2022/23 年度に比べ 4.0%増加の 139.5 百万トンの見込み。そのうち、普通小麦は同 3.9%増加の 131.9 百万トン、デュラム小麦は同 5.5%増加の 7.5 百万トンの見込み。

生育状況は、3 月から 4 月上旬までの降雨で干ばつの懸念がなくなったフランス、ドイツでは、3 月末以降は例年と比べ気温が低く、生長が緩やかに進んでいる。一方、ポーランド等では 3 月下旬の気温が例年より高くなり、再生長が促進された。なお、スペイン、ポルトガルでは干ばつが続いている。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2022/ 23 年度の輸入量は、前月予測から 1.5 百万トン上方修正され 10.5 百万トンと、前年度(4.6 百万トン)に比べ約 2 倍の増加。輸入されたウクライナ産小麦は、2022 年の高温乾燥で減産となった飼料向け EU 産とうもろこしの代替となるとみられる。

また、2022/23 年度の輸出量は、ロシア等の黒海諸国との競合から、前月予測から 2.0 百万トン下方修正され 35.0 百万トン。欧州委員会によれば、輸出先国は、普通小麦はアルジェリア(19.4%)、モロッコ(18.7%)の順で、北アフリカ諸国向けが多い。また、デュラム小麦はイスラエル(14.5%)、チュニジア(22.1%)、リビア(13.3%)の順で、中東、アフリカ向けが多い。

なお、4 月 5 日現在の EU 産の輸出価格 (FOB) はロシア、ウクライナの黒海諸国との価格競争が継続しており、3 月 3 日時点の 300 ドル/トンから 15 ドル/トン低下し、285 ドル/トンとなった。

ウクライナ産農産物の東欧諸国への過剰流入問題について、欧州委員会は 3 月、ブルガリア、ポーランド、ルーマニアの農家に対して、補助金の拠出を決定。一方、4 月中旬、ポーランド、ブルガリア、ハンガリー、スロバキアは、自国農業の保護を目的にウクライナ産穀物等の国内輸入禁止措置を発表。その後、欧州委員会は、6 月 30 日までのウクライナ産の小麦、とうもろこし、菜種、ひまわり種の輸入禁止措置（第 3 国へのトランジットを除く）案を提示した。

小麦－EU27（冬小麦を主に栽培）

(単位：百万トン)

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23 (22年7月～23年6月)		
			予測値、() は IGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	126.7	138.2	134.3 (133.7)	▲ 0.4	▲ 2.8
消 費 量	104.8	108.3	111.0 (108.4)	2.0	2.5
うち飼料用	42.5	45.0	47.0 (44.5)	2.0	4.4
輸 出 量	29.7	32.0	35.0 (34.4)	▲ 2.0	9.4
輸 入 量	5.4	4.6	10.5 (8.8)	1.5	126.8
期末在庫量	10.7	13.3	12.2 (15.6)	1.1	▲ 8.7
期末在庫率	8.0%	9.5%	8.3% (11.0%)	0.8	▲ 1.2
(参考)					
収穫面積(百万ha)	22.97	24.28	24.35 (24.17)	0.05	0.3
単収(t/ha)	5.51	5.69	5.52 (5.53)	▲ 0.02	▲ 3.0

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(11 April 2023)
IGC 「Grain Market Report」(16 March 2023)

図 EU27 の普通小麦及びデュラム小麦の輸出先

(普通小麦)

2023年1月			2022年7月～2023年1月		
国名	輸出量 (万トン)	シェア (%)	国名	輸出量 (万トン)	シェア (%)
アルジェリア	40.6	19.4%	モロッコ	287.3	14.2%
モロッコ	39.3	18.7%	アルジェリア	267.2	13.2%
ナイジェリア	21.6	10.3%	エジプト	162.9	8.1%
ヨルダン	8.5	4.1%	ナイジェリア	157.9	7.8%
中国	7.9	3.8%	サウジアラビア	106.7	5.3%
スーダン	6.6	3.1%	中国	103.0	5.1%
その他	85.0	40.6%	その他	932.6	46.2%
総計	209.5	100.0%	総計	2,017.6	100.0%

(デュラム小麦)

2023年1月			2022年7月～2023年1月		
国名	輸出量 (万トン)	シェア (%)	国名	輸出量 (万トン)	シェア (%)
チュニジア	1.0	22.1%	イスラエル	6.5	12.4%
リビア	0.6	13.3%	アラブ首長国連邦	6.3	12.1%
サウジアラビア	0.5	12.0%	チュニジア	5.4	10.3%
トルコ	0.5	10.5%	タンザニア	4.9	9.3%
スイス	0.4	9.4%	英国	3.5	6.6%
マリ	0.3	6.4%	アルジェリア	3.1	6.0%
その他	1.2	26.4%	その他	22.5	43.1%
総計	4.5	100.0%	総計	52.1	100.0%

資料：EU 委員会 Cereals export and imports(2023.3.20)をもとに農林水産省で作成

＜ 中国 ＞ 2022/23 年度の輸入量は、豪州からの輸入が増加し上方修正

【生育・生産状況】USDA によれば、2022/23 年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、前年度に比べ 0.6%増加の 137.7 百万トンと史上最高となる見込み。中国国家糧食物資備蓄局によれば、品質評価は、収穫された小麦の 63%が 1 等となり、全体の 96%以上が 3 等以上となった。

USDA 「Grain and Feed Annual」(2023.4.6)によれば、2023/24 年度の実産量は、単収の上昇と安定した作付面積の継続から、前年度をわずかに上回る見込み。生産コストは増加しているものの、価格水準が高く、高い収益性が見込まれることから、冬小麦の作付面積は前年度と同様の 22 百万ヘクタールとなっている。

3 月初旬の冬小麦の生育状況は、前年度に比べ良好で、3 月末現在、南東部の生産地域では分げつ期から出穂期を迎え、中部及び東部では再生長期に入っている。天候も良好で降水量も十分であるものの、春の気温が平年よりも高くなるとみられ、さび病や病害の発生が懸念されている。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2022/23 年度の輸入量は、豪州からの輸入増により前月予測から 2.0 百万トン上方修正され、前年度を 25.4%上回る 12.0 百万トンとなり、史上最高の 1995/96 年度の 12.5 百万トンに迫る見込み。輸入量は、2020/21 年度に 10.6 百万トンと前年度(5.4 百万トン)から大きく増加し、2022/23 年度には、世界の輸入量に占める中国の割合は世界第 1 位となった。

この輸入量の増加は、豊作が 3 年連続した豪州や、EU、カナダの豊富な輸出余力で、最近数か月、小麦の国際価格が 400 ドル/トン以下となり、中国国内の小麦、とうもろこしの取引価格を下回ったことによるとみられる。輸入量は、前年 7 月から本年 2 月までで、前年同期比で豪州産は 66%増加、カナダ産は 83%とそれぞれ増加した。

なお、中国の一部飼料メーカーは、飼料に配合するとうもろこしを相対的に安価な輸入小麦で代替したものの、とうもろこしの飼料用消費の回復に伴い、小麦の飼料向け消費は前年比で減少している。しかし、飼料用の小麦消費量は小麦消費量の 22%を占める。

農業農村部「農産品供需形勢分析月報 2023 年 2 月号」によれば、2 月の国内市場に小麦は十分に供給された一方、小麦粉の販売は低調となったことから製粉企業の需要は弱い。このため、今後の小麦価格は低下するとみられる。

USDA によれば、世界の期末在庫量に占める中国の割合は、62.4%と半分を超えている。

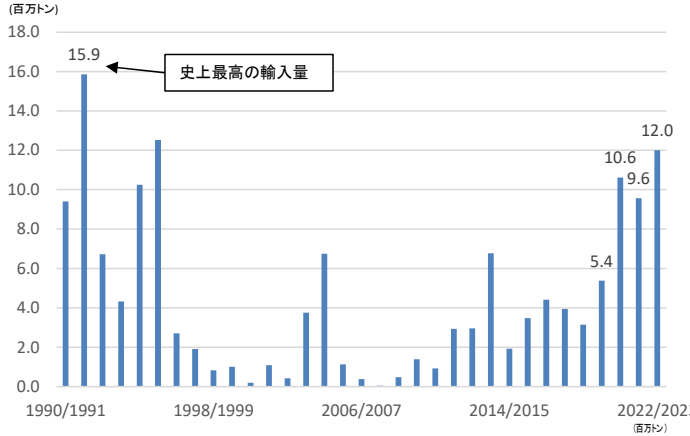
小麦－中国（冬小麦を主に栽培）

(単位：百万トン)

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23 (22年7月～23年6月)			
			予測値、() は IGC		前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	134.3	137.0	137.7	(135.0)	-	0.6
消 費 量	155.0	148.0	146.0	(132.0)	2.0	▲ 1.4
うち飼料用	45.0	35.0	32.0	(21.0)	2.0	▲ 8.6
輸 出 量	0.8	0.9	0.9	(1.3)	-	2.3
輸 入 量	10.6	9.6	12.0	(7.9)	2.0	25.4
期末在庫量	139.1	136.8	139.6	(139.8)	-	2.1
期末在庫率	89.3%	91.9%	95.0%	(104.9%)	▲ 1.3	3.2
(参考)						
収穫面積(百万ha)	23.38	23.57	23.52	(23.6)	-	▲ 0.2
単収(t/ha)	5.74	5.81	5.86	(5.83)	-	0.9

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
IGC 「World Agricultural Production」(11 April 2023)
「Grain Market Report」(16 March 2023)

図中国の小麦輸入量と世界に占める輸入割合の推移



2018/2019年度		2019/2020年度		2020/2021年度		2021/2022年度		2022/2023年度	
エジプト	12.4	エジプト	12.8	エジプト	12.1	エジプト	11.3	中国	12.0
インドネシア	10.9	トルコ	10.9	中国	10.6	インドネシア	11.2	エジプト	11.0
フィリピン	7.6	インドネシア	10.6	インドネシア	10.0	中国	9.6	EU	10.5
アルジェリア	7.5	アルジェリア	7.1	トルコ	8.1	トルコ	9.4	トルコ	10.5
ブラジル	7.0	フィリピン	7.1	アルジェリア	7.7	アルジェリア	8.3	インドネシア	10.0
トルコ	6.4	ブラジル	7.0	バングラデシュ	7.2	イラン	7.3	アルジェリア	8.2
EU	5.8	バングラデシュ	6.8	ナイジェリア	6.6	フィリピン	6.9	モロッコ	7.5
その他	116.7	その他	126.1	その他	132.5	その他	135.3	その他	104.6
合計	174.3	合計	188.4	合計	194.8	合計	199.2	合計	174.3

資料：USDA 「PS&D」(2023.4.11)をもとに農林水産省で作成

< ロシア > 2022/23 年度の輸出量は史上最高の 45.0 百万トン

【生育・生産状況】USDA によれば、2022/23 年度の生産量(クリミア地域分を含まず)は、前月予測からの変更はなく、史上最高の 92.0 百万トン(前年度比 22.4%増)となる見込み。作期別生産量は、冬小麦、春小麦とも前月予測からの変更はなく、それぞれ 68.0 百万トン(前年度比 30.3%増)、24.0 百万トン(同 4.5%増、史上最高)。なお、ロシア連邦統計庁(2023.3.10)によれば、2022/23 年度の実生産量は前年度比 37.0%増の 104.2 百万トン(冬小麦：74.0 百万トン、春小麦：30.2 百万トン)の見込み。

2023/24 年度の冬小麦の生育状況は、ロシアヨーロッパ部南部では土壌水分は十分で、分けつ期に入っている。また、作柄は概ね良好である。ヨーロッパ部北部では天候は平年並みとなっている。

また、ロシア農業省によれば、ロシア南部を中心に春小麦の播種が開始されており、播種面積は 0.72 百万ヘクタール(前年度同時期 0.16 百万ヘクタール)で、4 月 7 日現在の播種進捗率は 0.6%である。

一方、現地情報会社によれば、冬小麦の播種面積は 29.05 百万ヘクタール(前年度比 1.4%減)。

なお、ロシア穀物同盟によれば、2022/23 年度の小麦栽培では無機肥料の使用量が前年度比 5 %減少するなど、小麦価格低下等による収益の悪化から小麦生産は影響を受けた。また、2023/24 年度は生産コストが 30～50%上昇するとみられ、肥料、農薬、高品質な種子の使用の減少、経済制裁により農機補修部品の入手が困難になる等の問題が深刻化するリスクがある。

【貿易情報・その他】USDA によれば、ロシア産小麦の輸出価格(FOB)は、豊富な輸出余力から、4 月 5 日時点で 275 ドル/トンと前月(3 月 3 日時点で 295 ドル/トン)より下落し、主要小麦輸出国の中で最低となった(最高は米国の 386 ドル/トン)。また、2022/23 年度の輸出量は、価格競争力が高いことから前月予測から 1.5 百万トン上方修正され、前年度に比べ 36.4%増加の 45.0 百万トンの見込み。

現地情報会社によれば、旧来の輸出先である中東、アフリカ諸国向けの輸出量は、ウクライナ侵攻前後(注)で比較すると、国ごとで増減があるものの大きな変化はみられない。国別では、伝統的な輸出先国であるイラン向けは減少も、当初減少していたトルコ向けは 2022 年 10 月から輸出が増加している。

また、2023 年 3 月の輸出量は、前月に比べ 45.7%増加し、同月の過去 3 年平均(184.6 万トン)を上回る 454.6 万トンと高い水準にある。輸出先国は、エジプト(22.0%)、トルコ(20.5%)の順。なお、4 月の小麦輸出量は同月としては過去最高に近い 420～450 万トンになる見込み。

(注) (2020/21 年度及び 2021/22 年度(7 月～翌年 3 月)の平均と 2022/23 年度(7 月～翌年 3 月)の輸出数量比較)

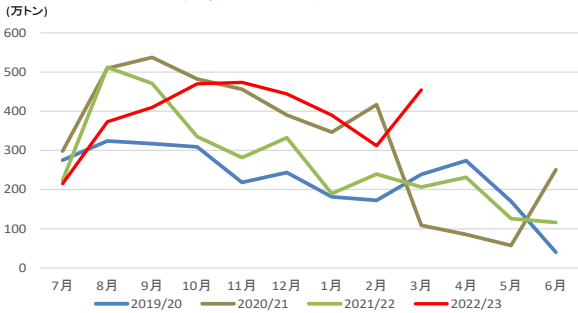
小麦一口ロシア(主産地の欧州部で冬小麦、シベリアで春小麦を栽培)

(単位：百万トン)

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23(22年7月～23年6月)		
			予測値、() はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	85.4	75.2	92.0 (83.5)	-	22.4
消 費 量	42.5	42.8	44.0 (42.9)	▲ 1.5	2.9
うち飼料用	19.0	19.5	20.5 (18.7)	▲ 1.0	5.1
輸 出 量	39.1	33.0	45.0 (38.9)	1.5	36.4
輸 入 量	0.4	0.3	0.3 (0.3)	-	-
期末在庫量	11.4	11.1	14.4 (11.0)	-	29.8
期末在庫率	13.9%	14.6%	16.2% (13.4%)	-	1.5
(参考)					
収穫面積(百万ha)	28.68	27.63	29.00 (28.7)	▲ 0.10	5.0
単収(t/ha)	2.98	2.72	3.17 (3.32)	0.01	16.5

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(11 April 2023)
IGC 「Grain Market Report」(16 March 2023)

図：ロシアの月別小麦輸出量の推移



資料：現地情報会社のデータをもとに農林水産省で作成

表：ロシア産小麦の主なアフリカ諸国、中東諸国への輸出量と輸出先国

(輸出量:万吨、増減率:%)							
アフリカ諸国	2020/21年度 2021/22年度 輸出量の平均	2022/23年度 輸出量	増減率	中東諸国	2020/21年度 2021/22年度 輸出量の平均	2022/23年度 輸出量	増減率
	国名	侵攻前			侵攻後	国名	
エジプト	616.2	643.1	4.4	トルコ	589.9	631.6	7.1
ナイジェリア	63.2	16.2	-74.3	イラン	305.0	174.7	-42.7
スーダン	87.0	135.6	55.9	イエメン	48.0	75.4	57.2
ケニア	46.6	97.2	108.8	イスラエル	44.7	79.3	77.4
タンザニア	37.9	48.8	28.8	UAE	20.9	42.8	104.8
南アフリカ	34.4	33.2	-3.3	レバノン	26.6	17.4	-34.6
セネガル	53.7	17.0	-68.3	オマーン	14.3	43.6	206.0
リビア	27.9	102.6	268.4	シリア	36.9	58.2	57.9
合計	966.6	1,093.7	13.1	合計	1,086.2	1,123.0	3.4

(注) 各年度の期間：7 月～翌年 3 月

資料：現地情報会社のデータをもとに農林水産省で作成

＜ウクライナ＞ 2022/23 年度の小麦の輸出量は EU 等への輸出増加から上方修正

【生育・生産状況】USDAによれば、2022/23年度の生産量(クリミア地域分を含む)は、前月予測からの変更はなく、21.0百万トン。史上最高だった前年度(33.0百万トン)から36.4%減少、過去5年平均(27.9百万トン)と比べても24.8%減少の見込み。また、ウクライナ農業政策食料省2023年度第1回生産見通し(2023.3.21)によれば、2022/23年度の実生産量は20.5百万トン。

また、2023/24年度の実生産量は、16.6百万トン(前年度比19.0%減)の見込み。2023/24年度の播種面積は、冬小麦が4.17百万ヘクタール(前年度比16.7%減)、春小麦が0.29百万ヘクタール(同30.7%増)の見込み。なお、4月14日時点の春小麦の播種面積は0.14百万ヘクタール。

2023/24年度の冬小麦の生育段階は、南部地域で3月初旬に再生長を開始し、分けつ期から第3葉形成期に入っている。作柄はオデッサ州等の一部で平年並みとなっている以外は、概ね良好から非常に良好である。また、3月末に降雨があり、土壌水分量は十分となっている。

【貿易状況・その他】USDAによれば、2022/23年度の実輸出量は、EU等への輸出増加から、前月予測から1.0百万トン上方修正され14.5百万トン。ロシアの侵攻の影響を受け前年度に比べ減少したものの、「黒海穀物イニシアチブ」と陸上輸送等の輸出継続で、前年度に比べ23.0%の減少に留まっている。

ウクライナ政府等によれば、2022/23年度のうち2022年7月～2023年3月のウクライナの小麦の輸出量は前年度同期比28.3%減の1,300.4万トン(海上輸送、陸路等での全ての輸出が含まれる)。また、輸出先国は、トルコ(22.3%)、ルーマニア(19.4%)、スペイン(12.5%)の順。前年度に比べ、スペイン、ルーマニア、ポーランド等の一部のEU諸国向けが増加した。

また、黒海穀物イニシアチブ「国連共同調整センター」によれば、合意に基づく2022年8月から2023年3月までの黒海港湾からの小麦輸出量は722.5万トンで、輸出先国は、スペイン(24.0%)、トルコ(17.1%)の順。なお、国連、ウクライナ、ロシア、トルコの4者によるウクライナ産穀物の黒海経由での輸出再開に関する合意は、2023年3月19日以降延長されたが、延長期間は未決着。

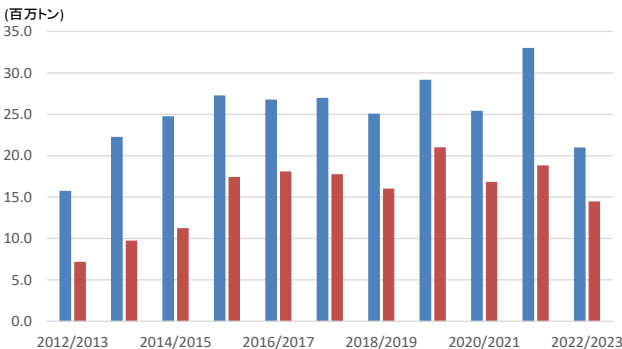
また、ポーランド、ルーマニア等の東欧諸国ではウクライナ産農産物の流入による国内市場への影響に懸念が高まり、4月中旬にポーランド、ハンガリー、スロバキア、ブルガリアはウクライナ産の輸入禁止措置を発表した。なお、ルーマニア、ハンガリー、ポーランドでは第3国向け輸出による通過(トランジット)に関して合意している。

小麦－ウクライナ（主に冬小麦を栽培）

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23(22年7月～23年6月)		
			予測値、()はIGC	前月予測からの変更	対前年度増減率(%)
生産量	25.4	33.0	21.0 (25.5)	-	▲ 36.4
消費量	8.7	10.0	9.0 (8.6)	▲ 0.2	▲ 10.0
うち飼料用	2.6	4.0	4.0 (2.1)	-	-
輸 出 量	16.9	18.8	14.5 (17.0)	1.0	▲ 23.0
輸 入 量	0.1	0.1	0.1 (0.1)	▲ 0.0	▲ 20.0
期末在庫量	1.5	5.8	3.3 (1.1)	▲ 0.8	▲ 42.1
期末在庫率	5.9%	20.0%	14.2% (4.3%)	▲ 4.2	▲ 5.8
(参考)					
収穫面積(百万ha)	6.85	7.41	5.35 (6.6)	-	▲ 27.8
単収(t/ha)	3.71	4.45	3.93 (3.84)	-	▲ 11.7

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(11 April 2023)
IGC 「Grain Market Report」(16 March 2023)

図：ウクライナの小麦生産量、輸出量の推移



資料：USDA「PS&D」(2023.4.11)をもとに農林水産省で作成

表：ウクライナ産小麦の輸出量と輸出先国

2022/23年度 (2023年3月)			2022/23年度 (2022年7月～2023年3月)			2021/22年度 (2021年7月～2022年2月※)		
国 名	輸出量	シェア	国 名	輸出量	シェア	国 名	輸出量	シェア
トルコ	37.2	22.3	トルコ	258.5	19.9	エジプト	273.8	15.1
ルーマニア	32.4	19.4	ルーマニア	216.0	16.6	インドネシア	265.5	14.7
スペイン	20.8	12.5	スペイン	182.5	14.0	トルコ	178.7	9.9
バングラデシュ	12.7	7.6	ポーランド	86.0	6.6	パキスタン	146.9	8.1
イエメン	8.3	5.0	バングラデシュ	73.2	5.6	サウジアラビア	75.1	4.1
エジプト	6.4	3.8	イタリア	47.6	3.7	イエメン	64.7	3.6
ポーランド	6.3	3.8	エジプト	45.7	3.5	バングラデシュ	63.2	3.5
その他	42.6	25.6	その他	390.9	30.1	その他	743.4	41.0
計	166.7	100.0	計	1,300.4	100.0	計	1,811.3	100.0

資料：現地情報会社のデータをもとに農林水産省で作成
※2022年3月の輸出データはロシアのウクライナ侵攻により不明

2 とうもろこし

(1) 国際的なとうもろこし需給の概要（詳細は右表を参照）

<米国農務省（USDA）の見通し> 2022/23 年度

生産量 前年度比 ↓ 前月比 ↓

・ロシア等で上方修正も、アルゼンチン、EU 等で下方修正され、前月から下方修正された。

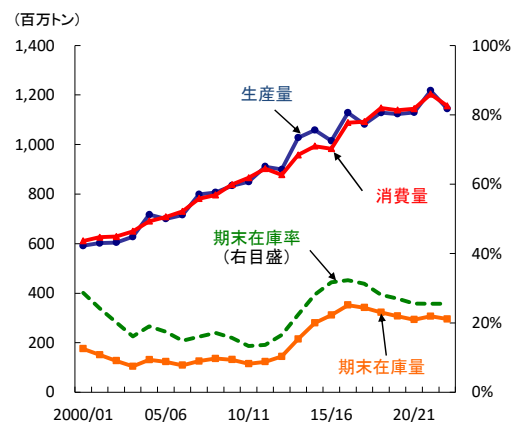
消費量 前年度比 ↓ 前月比 ↓

・ロシア、メキシコ等で上方修正も、エジプト、米国等で下方修正され、前月から下方修正された。

輸出量 前年度比 ↓ 前月比 ↓

・ウクライナ、ロシア等で上方修正も、アルゼンチン、メキシコ等で下方修正され、前月から下方修正された。

期末在庫量 前年度比 ↓ 前月比 ↓



資料：USDA「PS&D」（2023. 4. 11）をもとに農林水産省にて作成

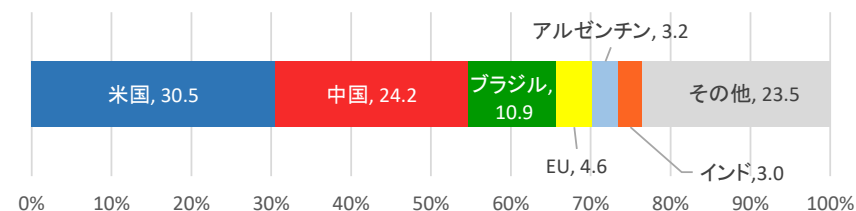
◎世界のとうもろこし需給

(単位：百万トン)

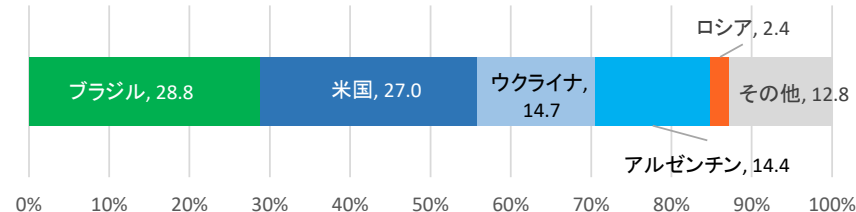
年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23		
			予測値	前月予測から の変更	対前年度 増減率(%)
生産量	1,129.4	1,217.0	1,144.5	▲ 3.0	▲ 6.0
消費量	1,144.0	1,202.9	1,156.1	▲ 0.7	▲ 3.9
うち飼料用	723.9	748.9	726.9	▲ 0.0	▲ 2.9
輸出量	182.7	205.7	173.8	▲ 0.9	▲ 15.5
輸入量	184.9	184.6	174.0	▲ 0.5	▲ 5.8
期末在庫量	292.8	306.9	295.4	▲ 1.1	▲ 3.8
期末在庫率	25.6%	25.5%	25.5%	▲ 0.1	0.03

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」(11 April 2023)

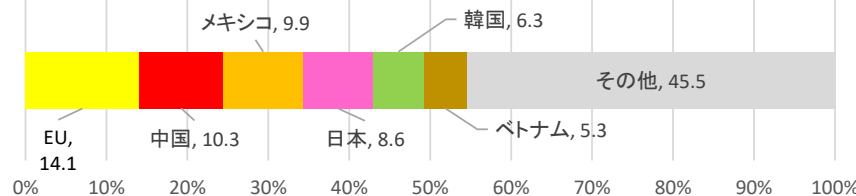
○ 2022/23 年度 世界のとうもろこしの生産量(1,144.5 百万トン) (単位：%)



○ 2022/23 年度 世界のとうもろこしの輸出量(173.8 百万トン) (単位：%)



○ 2022/23 年度 世界のとうもろこしの輸入量(174.0 百万トン) (単位：%)



（２）国別のとうもろこしの需給動向

＜ 米国 ＞ 2023/24 年度の作付意向面積は 3.9%増加

【生育・生産状況】2022/23 年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、夏季のコーンベルトの一部での乾燥により前年度より 8.9%減の 348.8 百万トンの見通し。

米国農務省（USDA）「Prospective Plantings」（2023.3.31）によれば、2023/24 年度の作付面積は 3,723 万ヘクタールと、肥料価格の高騰により減少した前年度に比べ 3.9%増加。市場の事前予想を上回った。USDA「Crop Progress」（2023.4.17）によれば、4 月 16 日現在で作付け進捗率は 8 %と、天候に恵まれたため、前年度同期（4 %）、過去 5 年平均（5 %）を上回っている。

【需要状況】USDA によれば、2022/23 年度の消費量は、加工用需要の減少により前月予測から 0.3 百万トン下方修正され、303.7 百万トン。生産量の減少に伴い、前年度に比べ 4.2%減少する見込み。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2022/23 年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、前年度より 25.2%減の 47.0 百万トンの見込みであり、2019/20 年度（45.2 百万トン）以来の低水準の見込み。輸出量減少の背景には、主要輸出先国の一つである中国が輸入先の多角化を進めるため、2023 年以降ブラジル産の輸入を本格化させていることもあるとみられる。

一方、米国はメキシコ向けの輸出を増大させている。USDA によれば、2022/23 年度の最初の 7 か月（2022 年 9 月～2023 年 3 月）で、メキシコ向け輸出量は 13.5 百万トン（史上最高の前年同期には及ばないが、過去 3 番目に高い水準）に達した。メキシコでは、増大する肉類消費に伴い、飼料需要が増加している中、米国・メキシコ・カナダ協定（USMCA）による自由化（関税及び割当数量制限なし）と米国・メキシコ間の鉄道輸送による低コストにより、ブラジル産やアルゼンチン産に対しても価格優位性を有する。このため、メキシコは米国のとうもろこし輸出の最大の相手国となっている。

USDA によれば、2022/23 年度の期末在庫量は、前月予測からの変更はなく、前年度より 2.6%減の 34.1 百万トンの見込み。期末在庫率は 9.7%で、前年度より上昇するものの、引き続き低水準の見込み。

とうもろこし－米国

（単位：百万トン）

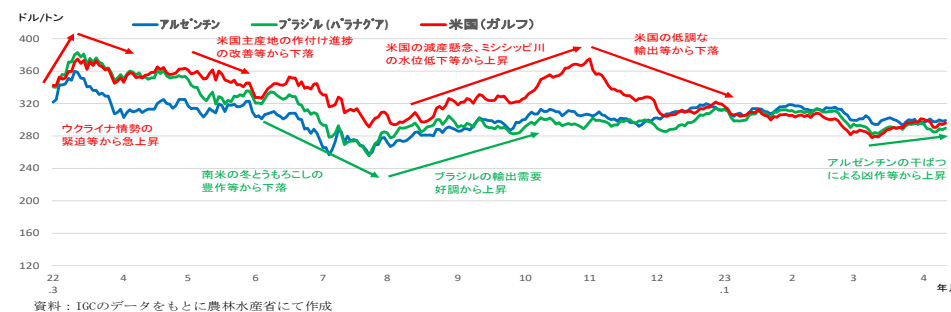
年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23 (22年9月～23年8月)		
			予測値	前月予測からの 変更	対前年度 増減率(%)
生産量	358.5	382.9	348.8	－	▲ 8.9
消費量	306.7	317.1	303.7	▲ 0.3	▲ 4.2
うち飼料用	142.4	145.3	134.0	－	▲ 7.8
エタノール用等	127.7	135.3	133.4	－	▲ 1.4
輸 出 量	69.8	62.8	47.0	－	▲ 25.2
輸 入 量	0.6	0.6	1.0	▲ 0.3	64.5
期末在庫量	31.4	35.0	34.1	－	▲ 2.6
期末在庫率	8.3%	9.2%	9.7%	0.0	0.5

（参考）

収穫面積(百万ha)	33.31	34.53	32.05	－	▲ 7.2
単収(t/ha)	10.76	11.09	10.88	－	▲ 1.9

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」（11 April 2023）

図：米国、ブラジル、アルゼンチンのとうもろこし輸出価格（FOB）の推移



＜ ブラジル ＞ 生産量は史上最高、輸出量は世界第 1 位の見通し

【生育・生産状況】USDA によれば、2022/23 年度の実生産量は、前月予測からの変更はなく、収穫面積及び単収の増加により、前年度より 7.8%増の 125.0 百万トンで史上最高の見込み。

現在、冬とうもろこしが生育期を迎えている。4月上旬から中旬にかけて南部リオ・グランデ・ド・スール州等の一部地域では高温・乾燥傾向が続いている。一方、中部マット・グロッソ州や北東部の州等では降雨に恵まれた。ただし、冬とうもろこしの生育には3月～5月の降雨が重要とされており、今後数週間で更なる降雨が必要と見られている。

ブラジル食料供給公社（CONAB）月例報告（2023.4.13）によれば、収穫中の 2022/23 年度の夏とうもろこしの生産量は、前年度比 8.8%増の 27.2 百万トンの見込み。一方、大豆収穫後の2月以降に作付けされた冬とうもろこしの生産量は、前年度比 10.8%増の 97.6 百万トンの見込み。夏作・冬作の合計では前年度比 10.4%増の 124.9 百万トンで史上最高の見込み。（P.23 大豆ーブラジルのクロップカレンダー参照）。

夏とうもろこしの収穫進捗率は、南部のリオ・グランデ・ド・スール州で4月13日現在、80%（前年並み）。冬とうもろこしについては、南部のパラナ州で4月13日現在、作付は終了し、9%が開花している。

【需要状況】USDA によれば、2022/23 年度の消費量は、前月予測からの変更はなく、前年度より 3.5%増の 73.0 百万トンと史上最高の見込み。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2022/23 年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、前年度より 3.6%増の 50.0 百万トンで史上最高となり、世界第 1 位の輸出国となる見込み。

ブラジル貿易統計によれば、2023 年 1～3 月の輸出量は 978.1 万トンで、前年同期（351.2 万トン）と比べ 2.8 倍となっている。内訳は、1 位が日本 180.5 万トン、2 位が韓国 110.6 万トン、3 位が中国 105.4 万トンの順。前年 11 月末以降、中国向け輸出が開始され、大豆の輸出が一巡する本年後半以降、冬とうもろこしの収穫を受け輸出が本格化するとみられる。

とうもろこしーブラジル

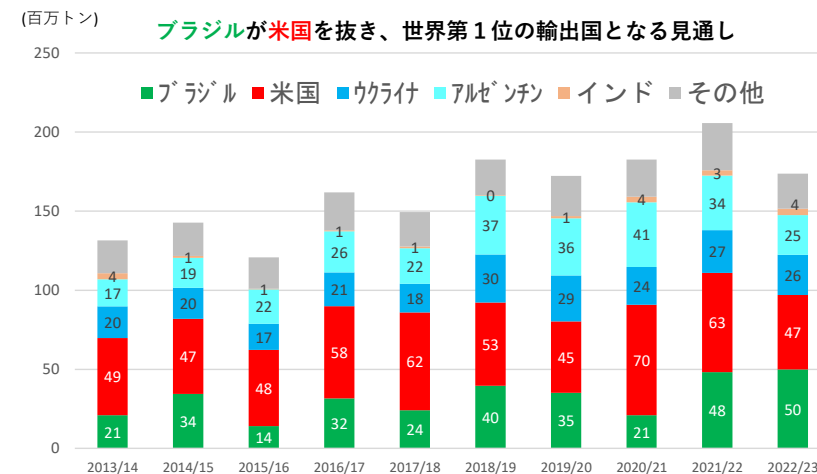
（大豆収穫後に栽培する冬とうもろこしが約 8 割、夏とうもろこしは約 2 割）

（単位：百万トン）

年 度	2020/21	2021/22 （見込み）	2022/23（23年3月～24年2月）			
			予測値、（ ）はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率（%）	
生 産 量	87.0	116.0	125.0 (123.1)	-	7.8	
消 費 量	70.0	70.5	73.0 (74.2)	-	3.5	
うち飼料用	59.5	59.5	61.5 (52.5)	-	3.4	
輸 出 量	21.0	48.3	50.0 (49.0)	-	3.6	
輸 入 量	2.9	2.6	1.3 (1.5)	-	▲ 50.0	
期末在庫量	4.2	4.0	7.3 (4.6)	0.2	83.1	
期末在庫率	4.6%	3.3%	5.9% (3.8%)	0.2	2.6	
（参考）						
収穫面積（百万ha）	19.90	21.80	22.70 (22.02)	-	4.1	
単収（t/ha）	4.37	5.32	5.51 (5.59)	-	3.6	

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」（11 April 2023）
IGC「Grain Market Report」（16 March 2023）

図：世界のとうもろこし輸出国の輸出量の推移



資料：USDA「PS&D」（2023.4.11）のデータをもとに農林水産省にて作成

< アルゼンチン > 干ばつにより大幅減産見込み（輸出税継続）

【生育・生産状況】USDA によれば、2022/23 年度の生産量は、2 月から 3 月の高温・乾燥により、単収が下方修正され、前月予測から 3.0 百万トン下方修正されて 37.0 百万トン（前年度比 25.3%減少）。生産量は、2017/18 年度（32.0 百万トン）以来の低水準となる見込み。4 月上旬には、ラ・パンパ州やブエノスアイレス州北部で降雨があったが、とうもろこしなどの夏作物の単収改善には遅すぎた。

ブエノスアイレス穀物取引所週報（2023.4.13）によれば、収穫進捗率は 13%であり、前年同期（19%）より遅れている。生産量は、長引く乾燥の影響で 36.0 百万トンと前年度（52.0 百万トン）から大幅に減少し、21 年ぶりの低水準の見通し。過去 60 年間で最悪の干ばつとも言われている。

【需要状況】USDA によれば、2022/23 年度の消費量は、前月予測からの変更はなく、前年度より 18.9%減の 12.0 百万トンの見込み。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2022/23 年度の輸出量は、生産量の下方修正に伴い、前月予測から 3.0 百万トン下方修正され、前年度より 27.3%減の 25.0 百万トンの見込み。

アルゼンチン国家統計局によれば、2023 年 1 月・2 月の輸出量は 259.9 万トンで、前年同期（359.6 万トン）より 27.7%減。内訳は、1 位がペルー 35.1 万トン、2 位がマレーシア 25.7 万トン、3 位がベトナム 24.1 万トンの順。

アルゼンチン政府は、財政赤字の補填等のため、2019 年 12 月 14 日、輸出税を約 7%から 12%へ引き上げ、継続している。2021 年 12 月 17 日、アルゼンチン農牧水産大臣は、とうもろこしと小麦の輸出に関し、国内向け穀物供給不足の回避と食料品価格の上昇を抑制するため、輸出上限数量を設定することを表明。4 月中旬現在、とうもろこしの輸出上限数量は 2021/22 年度 36 百万トン、2022/23 年度 20 百万トンに設定されている。

なお、アルゼンチン政府は、今般の干ばつ対策として、農業関係者に対し、融資や減税、割引手形を発行するなどの救済施策を公表した。しかし、農業者から救済措置が不十分という抗議活動があったため、さらに、4 月 10 日には、各種税の支払い猶予措置などの救済施策を公表した。

とうもろこしーアルゼンチン

(単位: 百万トン)

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23 (23年3月～24年2月)		
			予測値、() は IGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率 (%)
生産量	52.0	49.5	37.0 (46.0)	▲ 3.0	▲ 25.3
消費量	13.5	14.8	12.0 (19.6)	-	▲ 18.9
うち飼料用	9.5	10.9	8.0 (14.9)	-	▲ 26.6
輸 出 量	40.9	34.4	25.0 (28.0)	▲ 3.0	▲ 27.3
輸 入 量	0.0	0.0	0.0 (0.3)	-	-
期末在庫量	1.2	1.5	1.5 (2.2)	-	-
期末在庫率	2.2%	3.0%	4.0% (4.7%)	0.3	1.0
(参考)					
収穫面積(百万ha)	6.55	7.10	6.70 (7.80)	-	▲ 5.6
単収(t/ha)	7.94	6.97	5.52 (5.90)	▲ 0.45	▲ 20.8

資料: USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(11 April 2023)
IGC 「Grain Market Report」(16 March 2023)

写真: 北部サンタフェ州の第 2 期作とうもろこしの圃場風景 (4 月 3 日撮影)

3 月に降雨があったが、早期に作付けられた夏作物の単収改善には遅すぎた。第 2 期作の作柄は圃場によっては良好。



< 中国 > 生産量、消費量ともに史上最高、輸入量減少の見通し

【生育・生産状況】USDAによれば、2022/23年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、主産地の黒竜江省等東北地区及び華北平原で生育期を通じて良好な天候に恵まれたことから、単収の増加により、前年度より1.7%増の277.2百万トンで史上最高の見込み。

例年4月上旬、四川省では播種期を迎え、主産地の黒竜江省等で今後播種が開始される見通し。

【需要状況】USDAによれば、2022/23年度の消費量は、前月予測からの変更はなく、旺盛な飼料用消費から前年度より2.1%増の297.0百万トンと史上最高の見込み。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2022/23年度の輸入量は、前月予測からの変更はなく、国内産の豊作等を受け、前年度より17.7%減の18.0百万トンの見込み。

USDA「Grain and Feed Annual」(2023.4.6)によれば、2023年1月・2月の輸入量は5.3百万トンで、前年同期比で14%増。内訳は、米国産2.4百万トン(45%)、ブラジル産1.5百万トン(28%)、ウクライナ産1.2百万トン(23%)。前年11月以降、ブラジル産とうもろこしの輸入が開始したことで、ブラジル産の輸入が本格化している。

なお、黒海穀物イニシアチブ「国連共同調整センター」によれば、輸出が再開された前年8月から3月までの黒海経由のとうもろこしを、中国は394万トン(ウクライナ産とうもろこし輸出量全体の30%)輸入しており、ウクライナ産とうもろこしの最大の輸入国となっている。

農業農村部「農産品供需形勢分析月報2023年2月号」によると、2月の国内価格は、温暖な気候で貯蔵が難しくなったため、農家の売却意欲が高まり、市場供給が増加した一方、飼料需要が少なかったことから、2,980円/トンと前月(3,040円/トン)から下落した。飼料・加工メーカーの在庫補充の意欲は高くなく、農家は引き続き余剰穀物の売却を迫られるため、国内価格は軟調で推移するとみられる。また、2月の輸入価格は、2,760円/トンと前月(2,820円/トン)から下落した。

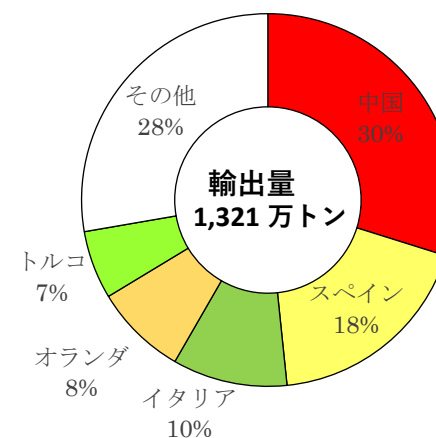
とうもろこしー中国

(単位:百万トン)

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23 (22年10月～23年9月)			
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)	
生 産 量	260.7	272.6	277.2 (277.2)	-	1.7	
消 費 量	285.0	291.0	297.0 (308.4)	-	2.1	
うち飼料用	203.0	209.0	216.0 (207.0)	-	3.3	
輸 出 量	0.0	0.0	0.0 (0.1)	-	-	
輸 入 量	29.5	21.9	18.0 (19.0)	-	▲ 17.7	
期末在庫量	205.7	209.1	207.3 (176.0)	-	▲ 0.9	
期末在庫率	72.2%	71.9%	69.8% (57.0%)	-	▲ 2.1	
(参考)						
収穫面積(百万ha)	41.26	43.32	43.07 (43.00)	-	▲ 0.6	
単収(t/ha)	6.32	6.29	6.44 (6.45)	-	2.4	

資料: USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(11 April 2023)
IGC「Grain Market Report」(16 March 2023)

図：黒海穀物イニシアチブによるウクライナ産とうもろこしの
主要輸出先 (2022年8月1日～2023年3月31日現在)
(中国がウクライナ産とうもろこしの最大の輸入国)



資料：国連ホームページ

＜ ウクライナ ＞ ロシアによる侵攻により、生産量は前年度より 36%減

【生育・生産状況】USDA によれば、2022/23 年度の実生産量は、前月予測からの変更はなく、収穫期の前年 10 月～11 月の記録的な降雨に加え、労働力不足、燃料費の高騰、輸送や貯蔵の問題といったロシアによる侵攻の影響を受け、主産地の収穫が著しく遅れたこと、一部のとうもろこしが刈り残され、圃場に放置されていることなどから、収穫面積及び単収が減少し、史上最高の生産量となった前年度より 35.9%減の 27.0 百万トンの見込み。

ウクライナ農業政策食料省 2023 年度第 1 回生産見通し（2023.3.21）によれば、2023/24 年度の作付面積は 3.6 百万ヘクタール（2022/23 年度比 11.1%減）、生産量は 21.7 百万トン（2022/23 年度 25.6 百万トンから 15.2%減）と更なる減産の見通し。ウクライナ最高議会の 3 月末の報告会によれば、代わりに大豆、エンドウ豆、春播き大麦の播種が増える見込み。

【需要状況】USDA によれば、2022/23 年度の消費量は、前月予測からの変更はなく、前年度より 37.4%減の 6.2 百万トンの見込み。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2022/23 年度の輸出量は、EU 及び中国向けの輸出増加を受けて前月予測から 2.0 百万トン上方修正され、前年度より 5.5%減の 23.5 百万トンの見込み。

ウクライナ政府等によれば、2022/23 年度（2022 年 10 月～2023 年 9 月）のうち、2022 年 10 月～2023 年 3 月の輸出量は 1,760 万トンであり（輸出量には、海上輸送に加え、陸路等での輸出分も含まれる）、前年度（2,484 万トン）の輸出ペースに近づきつつある。輸出先国は、中国、ルーマニア、スペイン、ハンガリー、イタリア、ポーランドの順となっている。

黒海穀物イニシアチブ「国連共同調整センター」によれば、輸出が再開された前年 8 月 1 日～3 月 31 日の黒海港湾からのとうもろこし輸出量は 1,321 万トンであり、輸出先国は、中国（394 万トン）、スペイン（245 万トン）、イタリア（132 万トン）、オランダ（106 万トン）の順となっている。

なお、国連、ウクライナ、ロシア、トルコの 4 者によるウクライナ産穀物の黒海経由での輸出再開に関する合意は、2023 年 3 月 19 日以降延長された。延長期間は未決着（ウクライナは 120 日間延長、ロシアは 60 日間延長を主張）。また、4 月中旬、ポーランド、ブルガリア、ハンガリー、スロバキアについては、自国農業の保護を目的にウクライナ産穀物について国内輸入禁止を発表した（詳細は P.14 小麦－ウクライナ参照）。

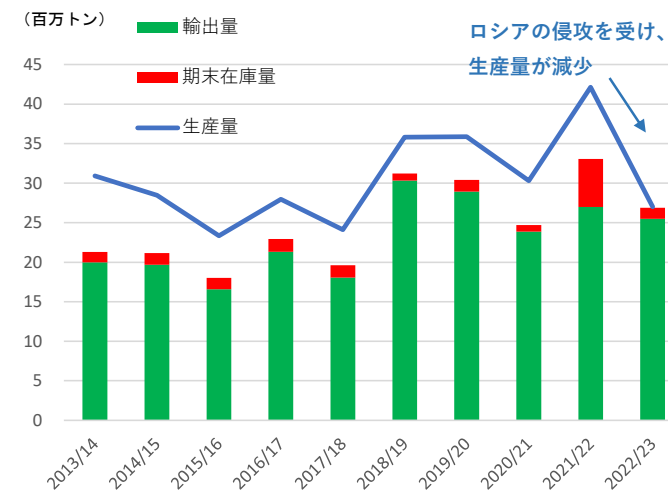
とうもろこし－ウクライナ

（単位：百万トン）

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23 (22年10月～23年9月)		
			予測値、() は IGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	30.3	42.1	27.0 (27.0)	-	▲ 35.9
消 費 量	7.1	9.9	6.2 (8.9)	-	▲ 37.4
うち飼料用	5.9	8.7	5.0 (5.5)	-	▲ 42.5
輸 出 量	23.9	27.0	25.5 (20.5)	2.0	▲ 5.5
輸 入 量	0.0	0.0	0.0 (0.0)	-	▲ 100.0
期末在庫量	0.8	6.1	1.4 (4.5)	▲ 1.0	▲ 77.2
期末在庫率	2.7%	16.5%	4.4% (15.5%)	▲ 3.7	▲ 12.1
(参考)					
収穫面積(百万ha)	5.40	5.49	4.00 (4.00)	-	▲ 27.1
単収(t/ha)	5.62	7.68	6.75 (6.75)	-	▲ 12.1

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(11 April 2023)
IGC 「Grain Market Report」(16 March 2023)

図：とうもろこしの生産量、輸出量、期末在庫量の推移



資料：USDA 「PS&D」 (2023. 4. 11) をもとに農林水産省にて作成。

3 コメ

(1) 国際的なコメ需給の概要（詳細は右表を参照）

<米国農務省（USDA）の見通し>

2022/23 年度

生産量

前年度比



前月比



- ・バングラデシュ等で上方修正も、インドネシア、ブラジル等で下方修正され、前月から下方修正された。

消費量

前年度比



前月比



- ・タイ、ブラジル等で下方修正も、米国、インドネシア等で上方修正され、前月から上方修正された。史上最高の見込み。

輸出量

前年度比



前月比



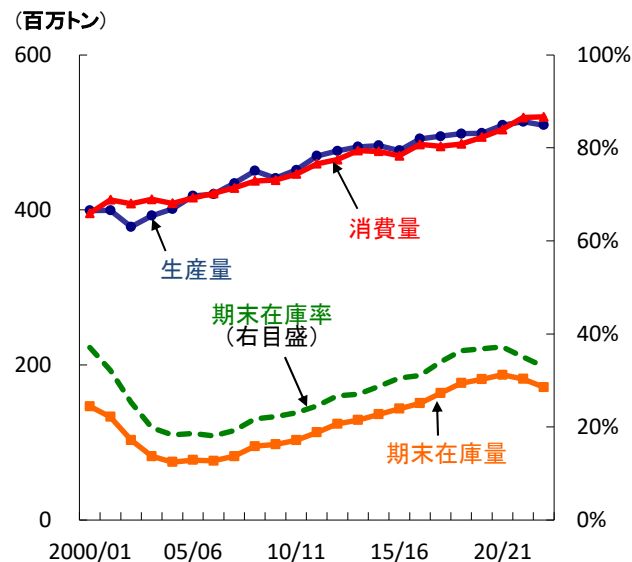
- ・中国等で下方修正も、タイ、ベトナム等で上方修正され、前月から上方修正された。

期末在庫量

前年度比



前月比



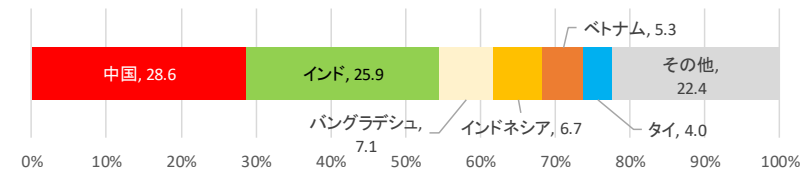
◎世界のコメ需給

（単位：百万精米トン）

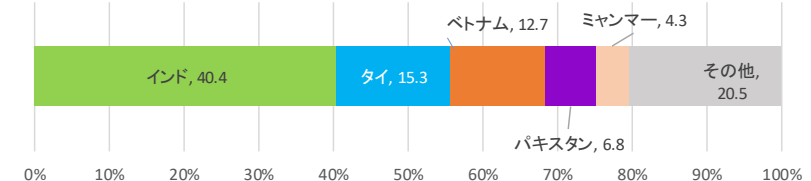
年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23		
			予測値	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	509.3	513.9	509.4	▲ 0.4	▲ 0.9
消 費 量	503.7	519.2	520.1	0.1	0.2
輸 出 量	51.2	56.8	55.7	0.8	▲ 1.9
輸 入 量	46.5	54.5	54.3	0.6	▲ 0.3
期末在庫量	187.3	182.0	171.4	▲ 2.0	▲ 5.8
期末在庫率	37.2%	35.1%	33.0%	▲ 0.4	▲ 2.1

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」（11 April, 2023）

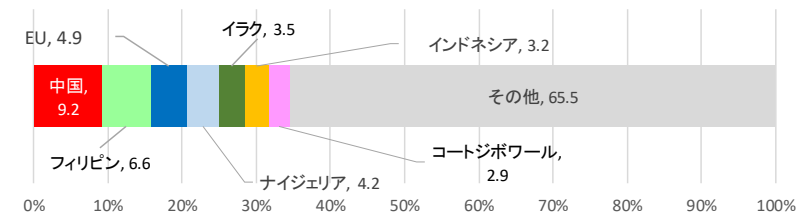
○ 2022/23年度 世界のコメの生産量(509.4百万トン)（単位：%）



○ 2022/23年度 世界のコメの輸出量(55.7百万トン)（単位：%）



○ 2022/23年度 世界のコメの輸入量(54.3百万トン)（単位：%）



（２）国別のコメの需給動向

＜ 米国 ＞ 2023/24 年度の作付面積は増加の見込み

【生育・生産動向】米国農務省（USDA）によれば、2022/23 年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、長粒種、中・短粒種とも収穫面積及び単収の減少により、対前年度比 16.3%減の 5.1 百万トンと、1993/94 年度以来の低水準となる見込み。

同「Prospective Plantings」（2023.3.31）によれば、2023/24 年度の作付意向面積は 104.5 万ヘクタールと、前年度（89.9 万ヘクタール）から 16.2%増加する見込み。中・短粒種の面積は 25.3 万ヘクタールと、前年度（17.0 万ヘクタール）から 49.1%増加する見込み。深刻な干ばつで 2 年連続作付面積が減少していた主産地のカリフォルニア州において、平年以上の灌漑用水供給見込みや、史上最高の価格水準等から、作付面積が飛躍的に増加すること等による。また長粒種の作付面積も、高水準の価格等から、79.2 万ヘクタールと、前年度（72.9 万ヘクタール）から 8.6%増加する見込み。

同「Crop Progress」（2023.4.17）によれば、主要生産 6 州の 4 月 16 日時点の作付進捗率は 38%と、前年同期（21%）、過去 5 年平均（28%）よりも進展している。なお、カリフォルニア州ではまだ作付けが開始されていない。発芽率は 18%と、前年同期（13%）、過去 5 年平均（15%）より高い。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2022/23 年度の消費量は、消費ペースが予想を上回ったため、前月予測から 0.1 百万トン上方修正されたが、対前年度比 0.2%減の 4.8 百万トンの見込み。

2022/23 年度の輸入量は、2 月のタイ産の香り米輸入量が予想よりも少なかったことから、前月予測から 0.1 百万トン下方修正されたものの、対前年度比 5.8%増の 1.3 百万トンと史上最高の見込み。

2022/23 年度の輸出量は、本年 2 月の輸出量が予想よりも多かったことや、3 月末のイラクへの追加輸出から、前月予測から 0.1 百万トン上方修正された。しかしながら、対前年度比 25.7%減の 1.9 百万トンと、1985/86 年度以来の低水準の見込み。

USDA 「Rice Outlook」（2023.4.13）によれば、4 月 4 日までの週のイラク向け長粒種（2 等、碎米 4 %混入）の価格は 760 ドル/トンと、本年 1 月末以降、2008 年 10 月初旬（772 ドル/トン）以来の高値となっている（P.20 の「長粒種の FOB 価格の推移」を参照）。また中粒種（地中海向けカリフォルニア米（1 等、碎米 4 %混入））の価格は 1,650 ドル/トンと、前年 12 月末以降、史上最高となっている。

コメー米国

主に長粒種はミシシッピ川沿いで栽培、中・短粒種のシェアは 1/4
米国のコメ生産に占めるカリフォルニア州のシェアは約 2 割

（単位：百万精米トン）

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23 (22年 8 月～23年 7 月)		
			予測値	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	7.2	6.1	5.1	-	▲ 16.3
消 費 量	4.9	4.8	4.8	0.1	▲ 0.2
輸 出 量	3.0	2.6	1.9	0.1	▲ 25.7
輸 入 量	1.1	1.2	1.3	▲ 0.1	5.8
期末在庫量	1.4	1.3	0.9	▲ 0.3	▲ 29.4
期末在庫率	17.8%	17.0%	13.2%	▲ 4.4	▲ 3.8
（参考）					
収穫面積(百万ha)	1.21	1.01	0.88	-	▲ 12.9
単収(もみt/ha)	8.54	8.64	8.28	-	▲ 4.2

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」 (11 April, 2023)

写真：アーカンソー州の播種前の土壌準備の風景

（4月 10 日撮影。圃場を耕して施肥をしているところ。）



< インド > 2022/23 年度の生産量・消費量とも史上最高の見込み

【生育・生産動向】USDAによれば、2022/23 年度の実生産量は、前月予測からの変更はなく、対前年度比 2.0%増の 132.0 百万トンと史上最高の見込み。インドのコメ生産量の 30%を占めるラビ米の作付けが前年度より 25%増加し、モンスーン期の降雨の遅れによるカリフ米の減産分が相殺される見通し。

ラビ米は、灌漑用水が十分供給されたことから、平年以上の作柄となるとみられる。収穫は4月末に終了する予定。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2022/23 年度の消費量は、前月予測からの変更はなく、前年度に引き続き政府の低所得世帯向け食料配給プログラム（約8億人が対象）向けにコメを供給していることから、前年度より 0.5%増の 111.0 百万トンと史上最高の見込み。

2022/23 年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、対前年度比 2.1%増の 22.5 百万トンの見込み。

インドは、カリフ米の生産減少による国内価格高騰を抑制する観点から、前年9月9日に輸出規制を発動（碎米（100%）の輸出禁止及びバスマティ米・パーボイルド米以外のコメへの輸出税課税（20%））。ただ、引き続き他のアジア諸国と比べ価格競争力があること等から、2022/23 年度の輸出量は史上最高となる見込み。また、依然として世界の輸出量の 40%を占め、世界第1位の輸出国となる見込み。

なお、現地情報によると、3月末に、特別措置として、セネガル（25 万トン）、ガンビア（10 万トン）、ジブチ及びエチオピア（各 1 万トン）への碎米輸出（合計 37 万トン）を財務省が許可した。

USDA「Grain: World Markets and Trade」（2023.4.11）によれば、インド産米（碎米5%混入）の4月4日までの週の輸出価格は 435 ドル/トンと、1月末から横ばいも、依然アジア主要輸出国中、最低の価格水準となっている（P.20の「長粒種の FOB 価格の推移」を参照）。

2022/23 年度の期末在庫量は、前月予測からの修正はなく、対前年度比 4.4%減の 32.5 百万トンの見込み。

※国際連合「世界人口予測2022」報告書（2022.7.11）によれば、2023 年 7 月 1 日時点で、インドの人口は推定 14 億 2,863 万人と、年央には中国の人口（14 億 2,567 万人）を上回り世界第1位となる見込み。

コメ・インド

雨季をカリフ、乾季をラビと呼ぶ。北部はカリフ・ラビ（小麦）の二毛作、南部はカリフ・ラビの二期作。主にインディカを栽培

（単位：百万精米トン）

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23 (22年10月～23年9月)			
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)	
生 産 量	124.4	129.5	132.0 (130.8)	-	2.0	
消 費 量	101.1	110.5	111.0 (110.1)	-	0.5	
輸 出 量	20.2	22.0	22.5 (20.6)	-	2.1	
輸 入 量	0.0	0.0	0.0 (0.0)	-	-	
期末在庫量	37.0	34.0	32.5 (32.3)	-	▲ 4.4	
期末在庫率	30.5%	25.7%	24.3% (24.7%)	-	▲ 1.3	

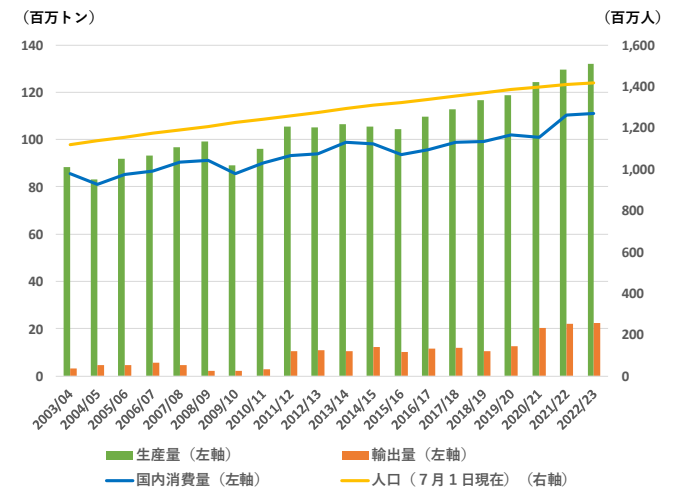
(参考)

収穫面積(百万ha)	45.77	46.28	47.00 (45.75)	-	1.6
単収(もみt/ha)	4.08	4.20	4.21 (2.86)	-	0.2

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(11 April, 2023)

IGC「Grain Market Report」(16 March, 2023) (単収は精米t/ha)

図：インドのコメ生産量・消費量・輸出量と人口の推移



資料：USDA「PS&D」(2023.4.11)及び国連「World Population Prospects 2022」をもとに農林水産省にて作成。なお2022年の人口は推計値。

< 中国 > 南部で早場米の作付け開始

【生育・生産動向】USDAによれば、2022/23年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、対前年度比2.0%減の146.0百万トンと、2013/14年度以来の低水準の見込み。

3月上旬に南部で早場米の播種が始まった。早場米の作付け地は広東、海南、湖北、安徽、江西の各地区で、合計2.48百万ヘクタール。中央政府が穀物の増産を推進していることから、南部の各州政府は農家にコメの増産を奨励しているほか、多様な栽培方法による増産方法を模索している。なお、南東部では、3月下旬から4月上旬にかけて豪雨があり、土壌水分が改善して稲の生育が促進された。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2022/23年度の消費量は、前月予測からの変更はなく、飼料用米の消費量の減少から、対前年度比0.9%減の155.0百万トンとなる見込み。

2022/23年度の輸入量は、輸入価格高騰や、それに伴う中国の輸入ペースの減少等から、前月予測から0.5百万トン下方修正され、史上最高となった前年度に比し16.0%減の5.0百万トンの見込み。中国はこれまで、とうもろこし等飼料用穀物の価格高騰を背景に、飼料用等として低価格の砕米をインド等から輸入してきた。

なお、USDAによれば、2022年にコメの関税割当て制度が設けられてから初めて、割当数量(5.32百万トン)を超える輸入となった。

また、中国外交部によれば、4月14日にブラジル農業畜産省と中国税関総署が、コメを含むブラジル産農産物の中国への輸出に関する衛生検疫手続の協議の促進に合意した。

中国海関統計によれば、2022年の年間輸入量は、前年の492.6万トンから25.0%増加し、615.6万トンとなった。輸入先はインドが218.0万トンと最も多く、対前年同期比で99.9%の増加。次いでパキスタンが119.7万トン(対前年同期比24.5%の増加)となっている。なお、2022年11月以降、インドの輸出規制やパキスタンの洪水による減産の影響から、輸入量は2020年及び2021年の同時期を下回った。

コメー中国

北部で一期作、南部で二期作。ジャポニカ(粳)米は東北地区、江蘇省等で栽培、生産シェアは3割程度

(単位：百万精米トン)

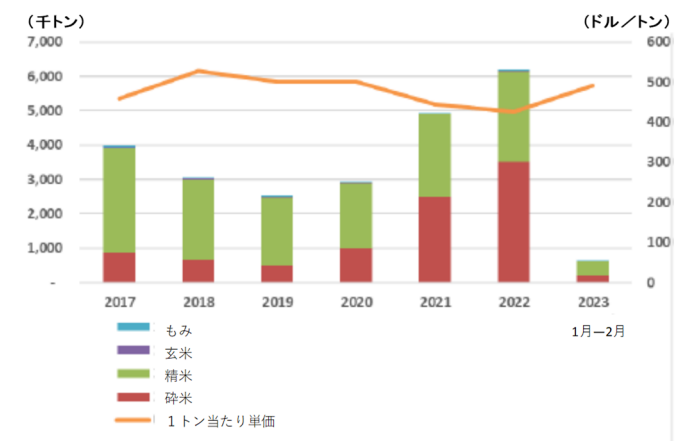
年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23 (22年7月～23年6月)			
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)	
生産量	148.3	149.0	146.0 (146.0)	-	▲ 2.0	
消費量	150.3	156.4	155.0 (151.1)	-	▲ 0.9	
輸出量	2.2	2.1	2.1 (2.2)	▲ 0.1	1.0	
輸入量	4.2	6.0	5.0 (4.3)	▲ 0.5	▲ 16.0	
期末在庫量	116.5	113.0	106.9 (104.9)	▲ 0.4	▲ 5.4	
期末在庫率	76.4%	71.3%	68.1% (68.4%)	▲ 0.2	▲ 3.3	

(参考)

収穫面積(百万ha)	30.08	29.92	29.45 (30.03)	-	▲ 1.6
単収(もみt/ha)	7.04	7.11	7.08 (4.86)	-	▲ 0.4

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(11 April, 2023)、
IGC「Grain Market Report」(16 March, 2023) (単収は精米t/ha)

図：中国のコメ輸入量の推移(2017-2023年)



資料：USDA「Grain and Feed Annual: China」(2023.4.6)より。

なお、2023年は1-2月の値。

< タイ > 乾季米（全作付面積の約 2 割を占める）は作付面積の 7 割が収穫済

【生育・生産動向】USDA によれば、2021/22 年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、良好な天候と十分な降雨により、2020/21 年度比 5.3%増の 19.9 百万トンの見込み。

2022/23 年度の実産量は、前月予測からの変更はなく、作付面積・単収ともに増加することが見込まれることから、対前年度比 1.6%増の 20.2 百万トンの見込み。

アセアン食料安全保障情報システム（2023.4）によると、乾季米の作付面積は 1.9 百万ヘクタールと、豊富な灌漑用水と高水準の価格から政府計画水準よりも 47%増加している。収穫は作付面積の 7 割で終了。豊富な灌漑用水と良好な天候から単収もよく、収量は前年度よりも増加の見込み。なお、政府は、雨季米の作付けに向けて、3～4 月にかけて農業用水の供給を制限しており、6 月末から 7 月初旬にかけての降雨不足による干ばつに備えるよう警告を発している。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2022/23 年度の輸出量は、2023 年にインドネシアへの輸出拡大が見込まれることから、前月予測から 0.3 百万トン上方修正され、対前年度比 10.7%増の 8.5 百万トンとなる見込み。インドに次ぐ世界第 2 位のコメ輸出国となる見通し。

2021/22 年度の実輸出量は、前月予測からの変更はなく、2020/21 年度比 22.1%増の 7.7 百万トンの見込み。

タイ米輸出業者協会によれば、2023 年 1～2 月の輸出量は、前年同期の 109.6 万トンから 31.0 百万トン増加し、140.5 万トンとなった。特にインドネシアは、政府備蓄の不足に対処するため輸入を拡大していることから、前年同期の 0.2 万トンから急増して 25.4 万トンとなった。そのほか、検疫問題で 7 年間停止していたタイ産米の輸入を 2022 年に再開したイラクが 16.4 万トン（前年同期 13.0 万トン）、米国が 10.9 万トン（同 14.3 万トン）、バングラデシュが 10.7 万トン（前年同期 0 トン）となった。なお、タイ政府は 3 月 22 日、世界経済が回復途上にあること、タイ国内の収穫量増加から、2023 年の輸出目標値を従来の 7.5 百万トンから 8.0 百万トンに引き上げた。ただし不安定な為替相場が懸案材料とのこと。

USDA 「Grain: World Markets and Trade」（2023.4.11）によれば、4 月 4 日までの週のタイ産米（長粒、2 等精米）の輸出価格は、特にインドネシアからの需要増大により前月から 26 ドル上昇し、499 ドル/トンとなった（P.20 の「長粒種の FOB 価格の推移」を参照）。

コメータイ

夏の雨季作と冬の乾季作で行われる。主にインディカ米を栽培

（単位：百万精米トン）

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23 (23年 1 月～23年12月)			
			予測値、()は IGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)	
生 産 量	18.9	19.9	20.2 (20.2)	-	1.6	
消 費 量	12.7	12.8	12.8 (12.4)	▲ 0.2	-	
輸 出 量	6.3	7.7	8.5 (8.1)	0.3	10.7	
輸 入 量	0.2	0.1	0.2 (0.3)	-	15.4	
期末在庫量	4.0	3.5	2.6 (6.5)	▲ 0.1	▲ 27.1	
期末在庫率	21.0%	17.1%	12.0% (31.8%)	▲ 0.5	▲ 5.1	
(参考)						
収穫面積(百万ha)	10.51	10.70	10.85 (10.85)	-	1.4	
単収(もみt/ha)	2.72	2.81	2.82 (1.86)	-	0.4	

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」 (11 April, 2023)
IGC 「Grain Market Report」 (16 March, 2023) （単収は精米t/ha）

表：タイの国別輸出量

（単位：万トン）

国名	2022 年 1～2 月	2023 年 1～2 月	増減
1 インドネシア	0.2	25.4	25.2
2 イラク	13.0	16.4	3.4
3 米国	14.3	10.9	▲ 3.4
4 バングラデシュ	0.0	10.7	10.7
5 セネガル	3.5	9.9	6.3
6 南アフリカ	6.1	8.9	2.8
7 日本	7.4	7.9	0.5
8 カメルーン	0.7	6.9	6.2
9 中国	16.5	6.7	▲ 9.8
10 モザンビーク	1.5	4.8	3.3
計	109.6	140.5	31.0

資料：タイ米輸出業者協会（2023. 4）

< ベトナム > 冬春作の生育・収穫が進展。輸出価格は2020年8月以来の高水準

【生育・生産動向】USDAによれば、2022/23年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、前年度比0.9%増の27.0百万トンの見込み。

2021/22年度の生産量は、前月予測からの変更はなく、2020/21年度比2.2%減の26.8百万トンの見込み。なお、2021/22年度は、全ての作期で、主として肥料高騰や高収益作物（果物・野菜・養殖）への転換等により、収穫面積が減少した。

アセアン食料安全保障情報システム（2023.4）によると、2022/23年度の生育状況に関し、北部では冬春作が分けつ期から幼穂育成期にある。十分な灌漑用水と良好な天候から、単収増加が見込まれる。南部では冬春作は収穫期にある。作付済み面積（188.0万ヘクタール）に対し、収穫済み面積は現時点で108.0万ヘクタール（進捗率57.4%）となっている。十分な灌漑用水と肥料価格の下落から、単収は7.1もみトン/ヘクタールと、前年度より1.8%高くなっている。特に南部のメコンデルタ地域では、土壌水分が十分なことから、夏秋作の播種が昨年度よりも速いペースで順調に進んでおり、播種済み面積は0.29百万ヘクタール。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2021/22年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、2020/21年度比12.7%増の7.1百万トンの見込み。

2022/23年度の輸出量は、2023年にインドネシアへの輸出拡大が見込まれることから、前月予測から0.3百万トン上方修正され、前年度比0.7%増の7.1百万トンの見込み。

ベトナム税関総局によれば、2023年1～3月の輸出量は196.3万トンで、上位からフィリピン（89.4万トン）、中国（34.0万トン）、インドネシア（14.9万トン）、マレーシア（7.7万トン）となっている。

USDA「Grain: World Markets and Trade」（2023.4.11）によれば、ベトナム産米（長粒種、5%碎米混入）の4月4日までの週の価格は、インドネシア等からの需要が増大したことから、前月の価格から25ドル/トン上昇して485ドル/トンと、2020年8月以来の水準となった。

なお、インドネシア政府はコメの国内価格安定化や政府備蓄積み増しのため、3月24日に、2023年内にコメ200万トンを輸入することを決定。このうち50万トンをベトナム、タイ、パキスタン、ミャンマーの4か国から輸入する計画を3月29日に公表。

コメベトナム

北部で二期作、南部で二期作・三期作。主に長粒種、一部で短粒種も栽培

(単位: 百万精米トン)

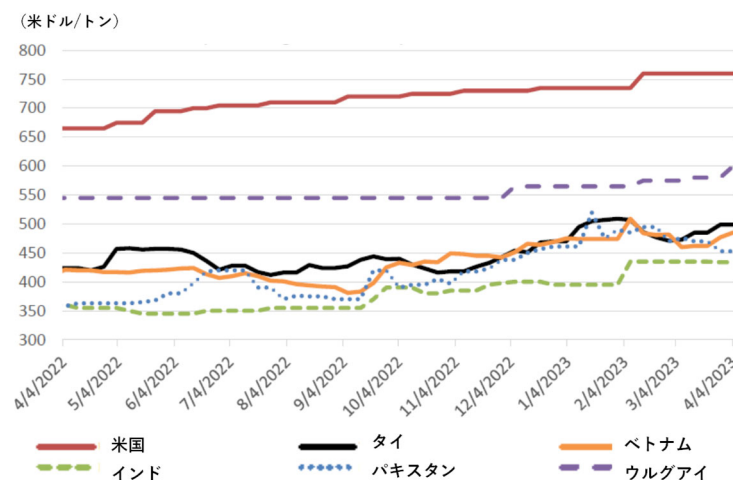
年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23 (23年1月～23年12月)			
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)	
生産量	27.4	26.8	27.0 (28.3)	-	0.9	
消費量	21.5	21.5	21.5 (22.5)	▲ 0.1	-	
輸出量	6.3	7.1	7.1 (7.0)	0.3	0.7	
輸入量	1.8	1.5	1.1 (1.1)	-	▲ 26.7	
期末在庫量	2.6	2.4	1.9 (3.3)	▲ 0.2	▲ 21.3	
期末在庫率	9.5%	8.2%	6.5% (11.2%)	▲ 0.8	▲ 1.8	

(参考)

収穫面積(百万ha)	7.31	7.19	7.17 (7.22)	-	▲ 0.3
単収(もみt/ha)	6.00	5.96	6.03 (3.92)	-	1.2

資料: USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(11 April, 2023)
IGC「Grain Market Report」(16 March, 2023) (単収は精米t/ha)

図：長粒種の FOB 価格の推移



資料: USDA「Grain: World Markets and Trade」(2023.4.11)より。

Ⅱ 油糧種子 大豆

(1) 国際的な大豆需給の概要（詳細は右表を参照）

<米国農務省（USDA）の見通し> 2022/23 年度

生産量 前年度比 ↑ 前月比 ↓

・アルゼンチン等で下方修正され、前月から下方修正された。史上最高の見込み。

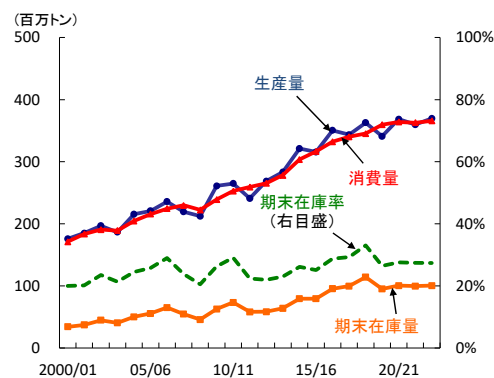
消費量 前年度比 ↑ 前月比 ↓

・アルゼンチン、中国等で下方修正され、前月から下方修正された。史上最高の見込み。

輸出量 前年度比 ↑ 前月比 ↓

・ウルグアイ等で下方修正され、前月から下方修正された。史上最高の見込み。

期末在庫量 前年度比 ↑ 前月比 ↑



資料：USDA「PS&D」（2023. 4. 11）をもとに農林水産省で作成

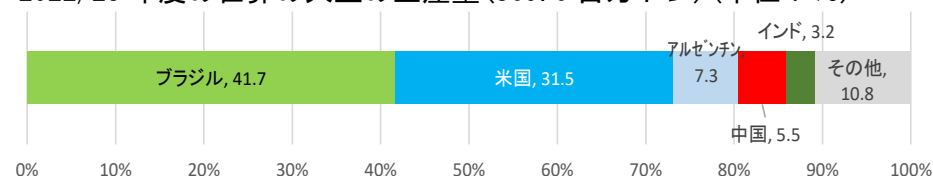
◎ 世界の大豆需給

(単位：百万トン)

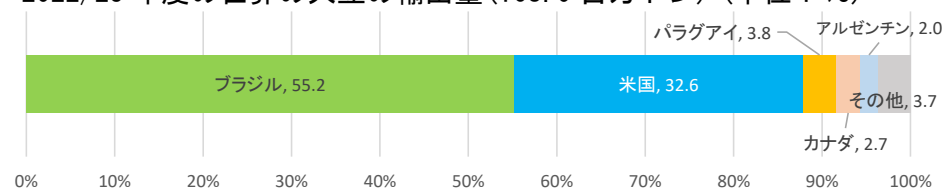
年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23		
			予測値	前月予測から の変更	対前年度 増減率(%)
生産量	368.6	359.8	369.6	▲ 5.5	2.7
消費量	364.0	363.0	365.8	▲ 5.3	0.8
うち搾油用	315.8	313.8	315.2	▲ 4.8	0.4
輸出量	164.9	154.0	168.0	▲ 0.4	9.1
輸入量	165.5	156.6	164.8	▲ 0.6	5.2
期末在庫量	100.4	99.7	100.3	0.3	0.6
期末在庫率	27.6%	27.5%	27.4%	0.5	▲ 0.1

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」(11 April 2023)

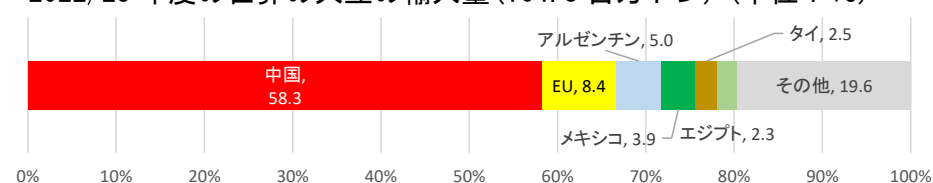
○ 2022/23 年度の世界の大豆の生産量 (369.6 百万トン) (単位：%)



○ 2022/23 年度の世界の大豆の輸出量 (168.0 百万トン) (単位：%)



○ 2022/23 年度の世界の大豆の輸入量 (164.8 百万トン) (単位：%)



（２）国別の大豆の需給動向

＜ 米国 ＞ 2023/24 年度の作付意向面積はほぼ前年並み

【生育・生産状況】米国農務省（USDA）「Prospective Plantings」（2023.3.31）によれば、2023/24 年度の作付面積は 3,541 万ヘクタールと前年度に比べ 0.1%増の見込み。市場の事前予想を下回った。USDA「Crop Progress」（2023.4.17）によれば、4 月 16 日現在で作付け進捗率は 4 %と、天候に恵まれ前年度同期（1 %）、過去 5 年平均（1 %）を上回っている。

2022/23 年度の生産量は、前月予測から変更なく、夏季のコーンベルトの一部での乾燥により前年度より 4.2%減の 116.4 万トンの見通し。

【需要状況】USDA によれば、2022/23 年度の消費量は、前月予測からの変更はなく、前年度より 1.5%増の 63.7 百万トンで史上最高の見込み。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2022/23 年度の輸出量は、前月予測からの変更はなく、生産量の減少、ブラジル産の豊作見通しによる価格下落を背景に、米国の輸出競争力が弱くなっており、前年度より 6.6%減の 54.8 百万トンの見込み。

USDA によれば、2022/23 年度の期末在庫量は、前月予測から変更はなく、前年度より 23.4%減の 5.7 百万トンの見込み。

なお、期末在庫率は 4.8%で、前年度を下回っており、2013/14 年度（2.6%）以来の低水準の見込み。

米国の輸出価格は、前年 12 月以降、ブラジル産に比べ割高で推移しており、2 月以降、ブラジル産の収穫期を迎え価格差が広がった（右図参照）。

USDA「Oilseeds」によれば、大豆輸出価格は、ブラジルの史上最高の生産量を背景に全体的に低下した。特に、ブラジルの価格が最も下落しており、米国やアルゼンチンとの価格差が拡大している。他の植物油の十分な供給がある中、大豆油の輸出価格が割高なこともあり、大豆搾油の利潤が加工業者にとって魅力的でなくなっていることも下押し圧力となっている。

大豆－米国

（単位：百万トン）

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23 (22年9月～23年8月)		
			予測値	前月予測からの変更	対前年度増減率(%)
生産量	114.8	121.5	116.4	－	▲ 4.2
消費量	60.9	62.8	63.7	－	1.5
うち搾油用	58.3	60.0	60.4	－	0.7
輸出量	61.7	58.7	54.8	－	▲ 6.6
輸入量	0.5	0.4	0.4	－	▲ 4.7
期末在庫量	7.0	7.5	5.7	－	▲ 23.4
期末在庫率	5.7%	6.1%	4.8%	－	▲ 1.3

(参考)

収穫面積(百万ha)	33.43	34.93	34.94	－	0.0
単収(t/ha)	3.43	3.48	3.33	－	▲ 4.3

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」（11 April 2023）

図：米国、ブラジル、アルゼンチン大豆輸出価格（FOB）の推移



資料：IGCのデータをもとに農林水産省にて作成

＜ ブラジル ＞ 生産量、輸出量ともに史上最高の見通し

【生育・生産状況】USDA によれば、2022/23 年度の実産量は、中西部で天候に恵まれ前月予測から 1.0 百万トン上方修正され、前年度より 18.0%増の 154.0 百万トンと史上最高の見込み。

また、ブラジル食料供給公社（Conab）月例報告（2023.4.13）によれば、2022/23 年度の実産量は、南部の州を中心に深刻な高温・乾燥の影響を受けた前年度より 22.4%増の 153.6 百万トンで史上最高の見込み。なお、収穫面積は、特に中西部のマット・グロッソ州（最大生産州）、マット・グロッソ・ド・ソル州等で増加見込み。

USDA 「World Agricultural Production」(2023.4.11) によれば、4 月初期時点で、収穫進捗率は 75%で、前年度（81%）を下回っている。マット・グロッソ州では収穫が完了。南部のパラナ州で 4 月 10 日現在、収穫進捗率は 94%。干ばつの被害を受けた南部のリオ・グランデ・ド・スール州では 4 月 18 日現在、17%が生殖生長期から充実期、収穫進捗率は 32%。なお、同州では、単収が 30%減少する見込み。

【需要状況】USDA によれば、2022/23 年度の実消費量は、搾油用需要が前月予測から上方修正され、前年度より 5.4%増の 56.9 百万トンと史上最高の見込み。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2022/23 年度の実輸出量は、前月予測から変更はなく、前年度より 17.3%増の 92.7 百万トンと史上最高の見込み。

ブラジル貿易統計によれば、2023 年 1 月～3 月の輸出量は 1,913 万トンで、前年同期（2,098 万トン）に比べ 8.8%減となっている。輸出先の内訳は、1 位が中国 1,404 万トン、2 位がスペイン 778 万トン、3 位がタイ 517 万トンとなっている。豊作見通しの 2022/23 年産の収穫に伴い、4 月以降、輸出量が増加する見込み。

大豆－ブラジル

(単位：百万トン)

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23 (22年10月～23年9月)		
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	139.5	130.5	154.0 (149.8)	1.0	18.0
消 費 量	49.7	54.0	56.9 (56.1)	0.5	5.4
うち搾油用	46.5	50.7	53.3 (53.3)	0.5	5.0
輸 出 量	81.7	79.1	92.7 (92.6)	-	17.3
輸 入 量	1.0	0.5	0.8 (0.6)	-	38.9
期末在庫量	29.6	27.6	32.8 (3.6)	1.2	18.7
期末在庫率	22.5%	20.7%	21.9% (2.4%)	0.7	1.1

(参考)

収穫面積(百万ha)	39.50	41.60	43.70 (43.46)	0.30	5.0
単収(t/ha)	3.53	3.14	3.52 (3.45)	▲ 0.01	12.1

資料：USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、

「World Agricultural Production」(11 April 2023)

IGC 「Grain Market Report」(16 March 2023)

ブラジルのクロップカレンダー(中部から南部)

2022/23年度の実作付けは、2022年9月以降、順次開始。

2023年2月以降、大豆の収穫が行われ、その後、一部の圃場で冬とうもろこしを栽培。

2022/23年度	2022年												2023年								
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9
夏とうもろこし	リオ・グランデ・ド・スール州等												収穫 27.2(百万t)								
	作付 4.4(百万ha)												→ 収穫夏冬作計 124.9百万t								
冬とうもろこし	作付面積夏冬作計 22.0百万ha												作付 17.6(百万ha)								
	マット・グロッソ州、パラナ州等												← 収穫 97.6(百万t)								
大豆	作付 43.6(百万ha)												大豆収穫後の一部圃場で冬とうもろこし作付け								
													収穫 153.6(百万t)								

資料：CONAB穀物レポート (2023. 4. 13)

＜ アルゼンチン ＞ 干ばつにより、生産量は対前年度 4 割減

【生育・生産状況】USDA によれば、2022/23 年度の実産量は、高温・乾燥が 3 月まで継続し、開花期を迎えていた遅植え大豆の単収に影響したことで、収穫面積、単収が下方修正され、前月予測から 6.0 百万トン下方修正された。高温・乾燥の影響を大きく受けた前年度より、単収見通しが更に減少することを受け、前年度より 38.5%減の 27.0 百万トンの見込み。2000/01 年度以降で最も低い水準の見込み。

ブエノスアイレス穀物取引所週報（2023.4.13）によれば、大豆の収穫進捗率は 4.3%であり、2022/23 年度の実産量は、25.0 百万トン（前年度（43.3 百万トン）より 42.3%減）の見込みであるが、今後、更なる下方修正の可能性もある。

【需要状況】USDA によれば、2022/23 年度の消費量は、生産量の下方修正に伴い、前月予測から 3.3 百万トン下方修正され、前年度より 18.1%減の 37.7 百万トンの見込み。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2022/23 年度の輸出量は、生産量が下方修正されたものの、前月予測から変更はなく、前年度より 18.9%増の 3.4 百万トンの見込み。

アルゼンチンは、丸大豆の搾油後に発生する大豆加工品の輸出が多く、大豆油及び大豆粕については、世界第 1 位の輸出国である。

USDA によれば、2022/23 年度の輸入量は、生産量の減産を一部補うため、近隣国であるブラジル及びパラグアイからの輸入増により、前月予測から 1.1 百万トン上方修正され、前年度より 116.1%増の 8.3 百万トンと史上最高の見込み。

アルゼンチン政府は、財政赤字の補填等のため、輸出税を設定している。2021 年 1 月以降、輸出税を大豆最大 33%、大豆油及び大豆粕 31%と設定。2022 年 3 月に、大豆油及び大豆粕の輸出税について 2022 年末まで 2 %引き上げたが、2023 年 1 月からは 31%に戻っている。

なお、アルゼンチン政府は、今般の干ばつ対策として、農業関係者に対し、融資や減税、割引手形を発行するなどの救済施策を公表した。さらに、4 月 10 日には、各種税の支払い猶予措置などの救済施策を公表した。また、外貨獲得のため、4 月 10 日から 5 月 31 日までの間の 45 日間を超えない範囲で、大豆優遇為替レート（1 ドル＝300 ペソ）を適用する。

大豆－アルゼンチン

（単位：百万トン）

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23（22年10月～23年9月）			
			予測値、()はIGC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)	
生 産 量	46.2	43.9	27.0 (29.0)	▲ 6.0	▲ 38.5	
消 費 量	47.4	46.0	37.7 (35.8)	▲ 3.3	▲ 18.1	
うち搾油用	40.2	38.8	32.0 (33.8)	▲ 3.3	▲ 17.6	
輸 出 量	5.2	2.9	3.4 (2.1)	－	18.9	
輸 入 量	4.8	3.8	8.3 (8.0)	1.1	116.1	
期末在庫量	25.1	23.9	18.1 (2.0)	▲ 1.7	▲ 24.3	
期末在庫率	47.6%	48.9%	44.0% (5.3%)	▲ 0.6	▲ 4.8	
(参考)						
収穫面積(百万ha)	16.47	15.90	15.50 (14.90)	▲ 0.40	▲ 2.5	
単収(t/ha)	2.81	2.76	1.80 (1.95)	▲ 0.33	▲ 34.8	

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」

「World Agricultural Production」(11 April 2023)

IGC「Grain Market Report」(16 March 2023)

写真：北部サンタフェ州の早植え大豆の圃場風景 （4月3日撮影）

圃場の大豆は成熟しているが、夏季の高温・乾燥の影響で、粒が小さく、サイズにばらつきがある。



< 中国 > 生産量、消費量は史上最高、輸入量も増加見通し

【生産・生育状況】USDAによれば、2022/23年度の実生産量は、前月予測からの変更はなく、主産地の黒竜江省等東北地区で生育期を通じて良好な天候に恵まれたことに加え、政府の補助金による大豆生産奨励策等により収穫面積が大幅に増加したことから、前年度より23.7%増の20.3百万トンで史上最高の見込み。

なお、例年、4月後半から主産地の東北地区で播種が開始される見込み。

2月13日に公表された中国共産党・国務院（内閣に相当）の中央1号文件には、引き続き大豆の作付け拡大の取組等について記載された。

【需要状況】USDAによれば、2022/23年度の実消費量は、搾油用需要の低下を踏まえ、前月予測から1.0百万トン下方修正されたものの、畜産向け国内大豆粕需要が前年度（景気減速により豚肉を中心に食肉需要が低調）と比べれば回復することにより、前年度より4.4%増の112.3百万トンと史上最高の見込み。

【貿易情報・その他】USDAによれば、2022/23年度の実輸入量は、前月予測からの変更はなく、前年度より4.8%増の96.0百万トンの見込み。

USDAによれば、2022/23年度の期末在庫量は、前月予測から1.0百万トン上方修正され、35.3百万トンで史上最高の見込み。2022/23年度の期末在庫率は、前年度から2.2ポイント増加し、31.4%となる見込み。

「OIL WORLD Weekly」（2023.4.14）によれば、中国では現在大豆備蓄を進めており、輸入量も増加している。北米、南米からの3月の大豆輸入量は、前年同月より16%増の11.5百万トン、2022/23年度の累計（2022年9月～2023年3月）は、前年同期より10%増の58.3百万トンとなった。

農業農村部「農産品供需形勢分析月報 2023年2月号」によると、2月の国内価格（山東省の国産大豆工場渡し価格）は、前月（6,060元/トン）から小幅に下落し、6,040元/トンとなった。主な要因としては、春節後、一定の在庫需要があり市場取引は回復したものの、東北部の農家の穀物余剰が市場に出回ったことによる。また、2月の輸入価格（山東省の輸入大豆価格）は、5,400元/トンと前月並みとなった。

大豆－中国

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23 (22年10月～23年9月)			
			予測値、()はIGC		前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)
生 産 量	19.6	16.4	20.3	(20.3)	-	23.7
消 費 量	112.7	107.6	112.3	(114.6)	▲ 1.0	4.4
うち搾油用	93.0	87.5	91.0	(95.5)	▲ 1.0	4.0
輸 出 量	0.1	0.1	0.1	(0.1)	-	-
輸 入 量	99.7	91.6	96.0	(95.1)	-	4.8
期末在庫量	31.2	31.4	35.3	(29.3)	1.0	12.4
期末在庫率	27.6%	29.2%	31.4%	(25.5%)	1.2	2.2
(参考)						
収穫面積(百万ha)	9.88	8.42	10.24	(9.90)	▲ 0.03	21.6
単収(t/ha)	1.98	1.95	1.98	(2.05)	-	1.5

資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」、
「World Agricultural Production」(11 April 2023)
IGC「Grain Market Report」(16 March 2023)

図：中国における大豆の期末在庫量の推移
(2022/23年度は35.3百万トンで史上最高の見込み)



出典：米国農務省「PS&D」（2023.4）を農林水産省で加工

＜ カナダ ＞ 2023/24 年度の生産量は収穫面積増で増産見込み

【生育・生産状況】USDA によれば、2022/23 年度の実産量は、前月予測からの変更はなく、収穫面積及び単収の増加を受け、前年度より 5.1%増の 6.5 百万トンの見込み。

カナダの大豆生産は、小麦やなたねと異なり、東部のオンタリオ州が主産地で、生産量の半分以上のシェアがある。オンタリオ州に隣接するマニトバ州、ケベック州でも生産されている。

カナダ農務農産食品省（AAFC）「Outlook for Principal Field Crops」（2023.4.21）によれば、この春に作付けされる 2023/24 年度の実産量については、収穫面積が前年度から増加して、2.27 百万ヘクタールとなるとともに、平年並みの天候であれば単収が 3.0 トン/ヘクタールとなると予測されることから、前年度より 3.5%増の 6.8 百万トンであり、過去 5 年平均を上回る見込み。

【需要状況】USDA によれば、2022/23 年度の消費量は、搾油用需要が前月予測から 0.1 百万トン上方修正されたものの、前月予測からの変更はなく、前年度より 11.6%増の 2.6 百万トンの見込み。

【貿易情報・その他】USDA によれば、2022/23 年度の実輸出量は、輸出が好調なことから前月予測から 0.3 百万トン上方修正され、前年度より 5.0%増の 4.5 百万トンの見込み。

AAFC によれば、2022/23 年度の実輸出量は、前年度から 3 %増の 4.4 百万トンの見込み。

カナダ穀物委員会（Canadian Grain Commission）によれば、2022/23 年度（2022 年 8 月～2023 年 7 月）のうち、2022 年 8 月～2023 年 2 月の輸出量は 299.2 万トンとなり、国別では、中国（128.8 万トン）向けが 43%を占め、続いて、イラン（44.8 万トン）、アルジェリア（32.1 万トン）、イタリア（25.1 万トン）の順となっている。2023 年 2 月の輸出量は 5.8 万トンで、全量が中国向けである。

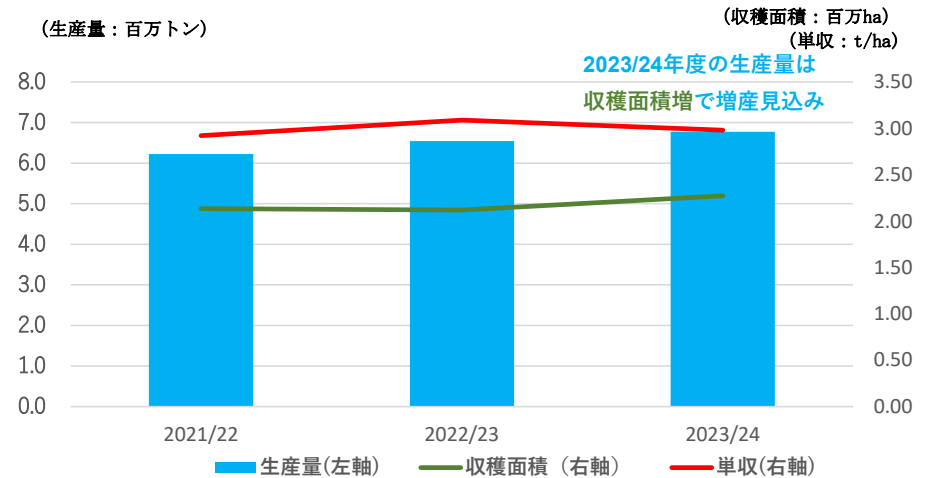
USDA によれば、2022/23 年度の期末在庫量は、前月予測から 0.3 百万トン下方修正され、0.4 百万トンの見込み。2022/23 年度の期末在庫率は、前月予測から 4.6 ポイント下方修正され、4.9%の見込み。

大豆－カナダ

年 度	2020/21	2021/22 (見込み)	2022/23 (22年8月～23年7月)			
			予測値、()はAAFC	前月予測 からの変更	対前年度 増減率(%)	
生 産 量	6.4	6.2	6.5 (6.5)	-	5.1	
消 費 量	2.6	2.3	2.6 (2.5)	-	11.6	
うち搾油用	1.6	1.8	2.0 (1.9)	0.1	5.7	
輸 出 量	4.6	4.3	4.5 (4.4)	0.3	5.0	
輸 入 量	0.5	0.5	0.5 (0.4)	-	▲ 7.6	
期末在庫量	0.3	0.4	0.4 (0.4)	▲ 0.3	▲ 18.0	
期末在庫率	4.1%	6.5%	4.9% (5.1%)	▲ 4.6	▲ 1.5	
(参考)						
収穫面積(百万ha)	2.04	2.08	2.12 (2.12)	-	1.9	
単収 (t/ha)	3.12	2.99	3.09 (3.09)	-	3.3	

資料：USDA 「PS&D」
「World Agricultural Production」 (11 April 2023)
AAFC 「Outlook for Principal Field Crops」 (21 April 2023)

図：カナダの直近3か年の生産量等の推移



資料：AAFC 「Outlook for Principal Field Crops」 (2023.4.21) をもとに農林水産省にて作成。

(参考1)本レポートに使用されている各国の穀物年度について (2022/23年度)

	小麦	とうもろこし	コメ	大豆
米国	22年6月～23年5月	22年9月～23年8月	22年8月～23年7月	22年9月～23年8月
カナダ	22年8月～23年7月			22年8月～23年7月
豪州	22年10月～23年9月		23年3月～24年2月	
EU	22年7月～23年6月	22年10月～23年9月		
中国	22年7月～23年6月	22年10月～23年9月	22年7月～23年6月	22年10月～23年9月
ロシア	22年7月～23年6月	22年10月～23年9月		22年9月～23年8月
ウクライナ	22年7月～23年6月	22年10月～23年9月		
ブラジル		23年3月～24年2月	23年4月～24年3月	22年10月～23年9月
アルゼンチン	22年12月～23年11月	23年3月～24年2月		22年10月～23年9月
タイ			23年1月～12月	
インド	22年4月～23年3月		22年10月～23年9月	
ベトナム			23年1月～12月	

注 市場年度は、おおむね各国で作物が収穫される時期を期首として各国ごとに設定されているため、国、作物によって年度の開始月は異なります。
 例えば、2022/23年度は、米国の小麦では2022年6月～2023年5月、ブラジルのとうもろこしでは2023年3月～2024年2月です。
 なお、各国別、作物別の市場年度は、米国農務省によります。
<https://apps.fas.usda.gov/psdonline/app/index.html#/app/downloads> (「Reference Data」タブを参照)

(参考2)単位換算表

1 容積→重量

1 Bushel (ブッシェル) (穀物により異なる)	0.027216	メトリックトン	小麦、大豆	米国等
	0.021772	メトリックトン	大麦	
	0.025401	メトリックトン	とうもろこし	
	0.014515	メトリックトン	オーツ	
1 CWT(百ポンド)	0.045359	メトリックトン	コメ	米国等

2 面積

1Acre(エーカー)	0.40469	ヘクタール	米国等
1rai(ライ)	0.16	ヘクタール	タイ
1 亩(ムー)	0.0667	ヘクタール	中国

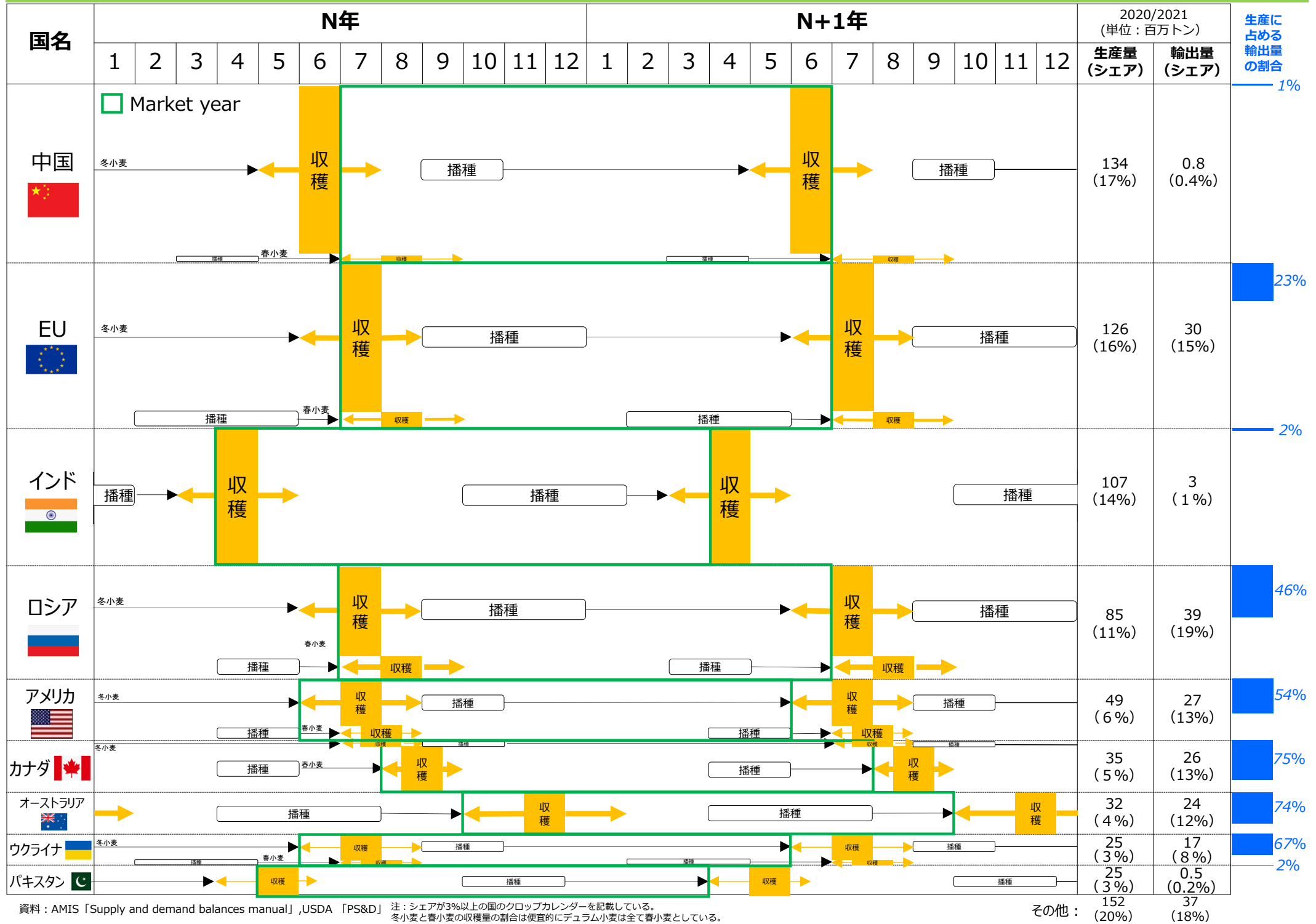
3 その他

1ガロン	4.536	リットル	英国
1ガロン	3.785	リットル	米国
1LAKH(ラック)	10万	位取り	インド
1斤	500g	重量	中国
華氏→摂氏 : $^{\circ}\text{C} = (^{\circ}\text{F} - 32) \div 1.8$			

(参考3)各国のクロップカレンダー一覧(主要品目毎)

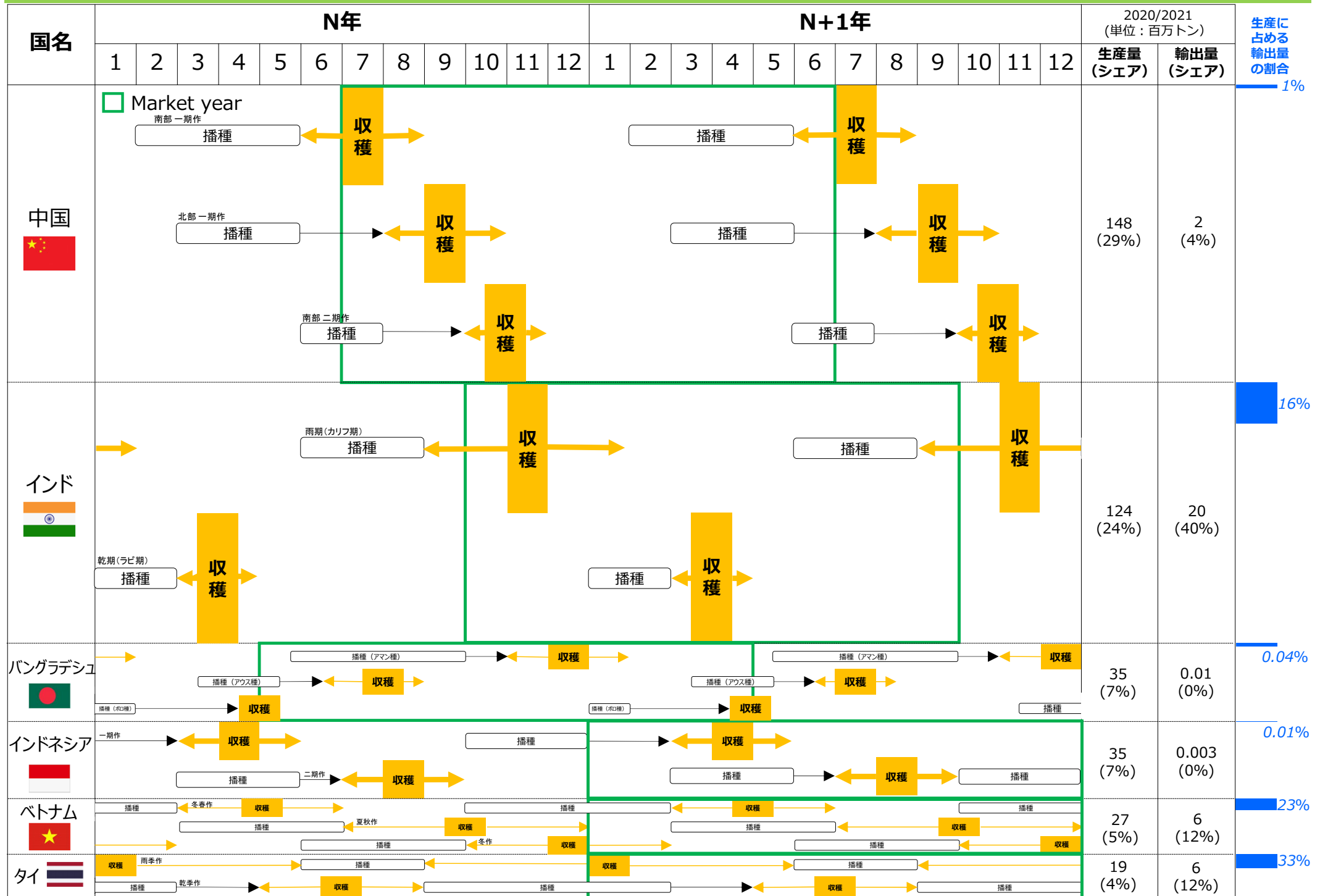
主要生産国のクロープカレンダー(小麦)

※カレンダーの縦幅は世界の生産量に占める各国の割合を示している。



主要生産国のクロップカレンダー(米)

※カレンダーの縦幅は世界の生産量に占める各国の割合を示している。

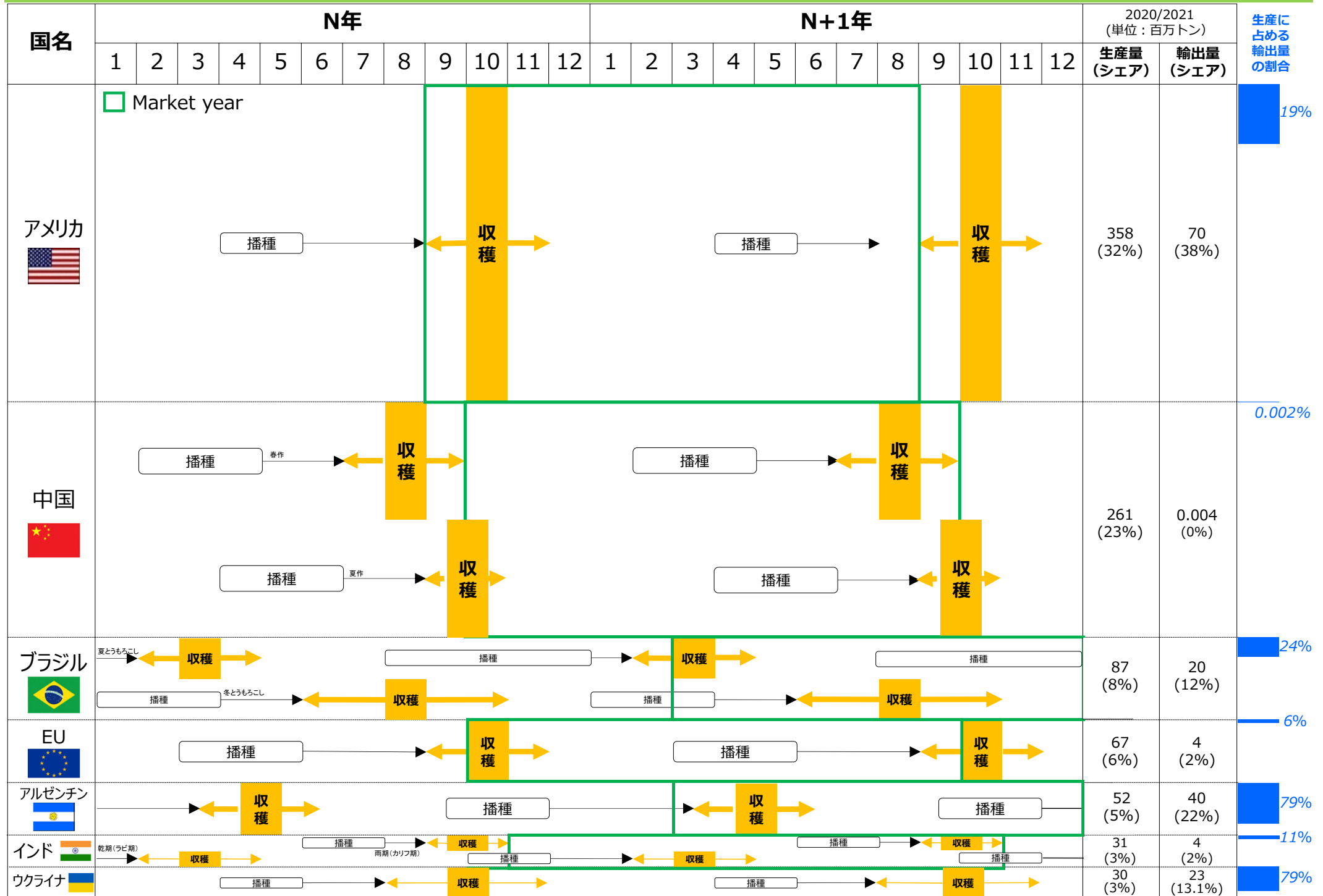


資料：AMIS「Supply and demand balances manual」,USDA「PS&D」 注：シェアが3%以上の国のクロップカレンダーを記載している。

その他：121
(24%) 16
(32%)

主要生産国のクロープカレンダー(とうもろこし)

※カレンダーの縦幅は世界の生産量に占める各国の割合を示している。

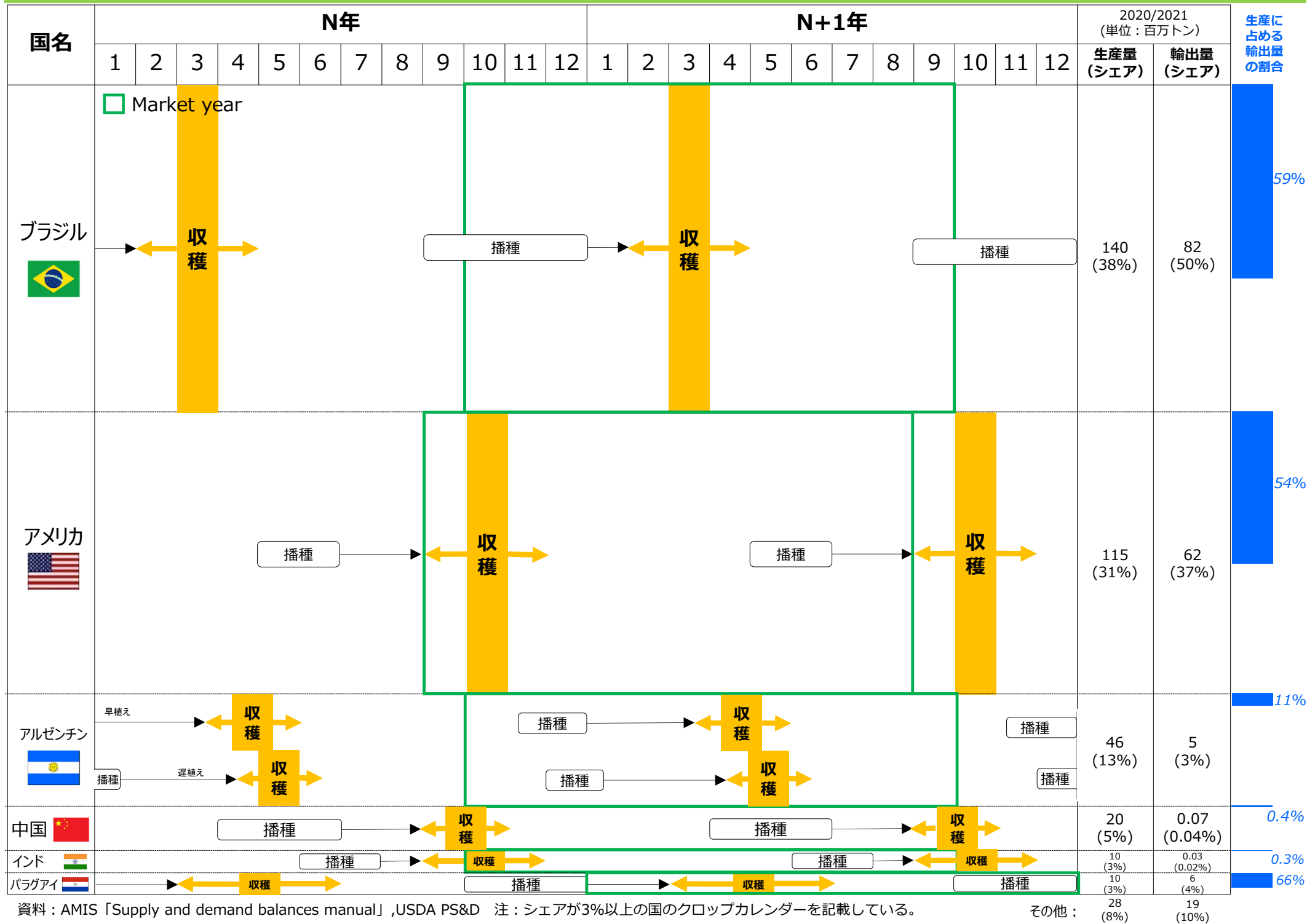


資料: AMIS「Supply and demand balances manual」, USDA「PS&D」注: シェアが3%以上の国のクロープカレンダーを記載している。

その他: 242 (19%) 21 (11%)

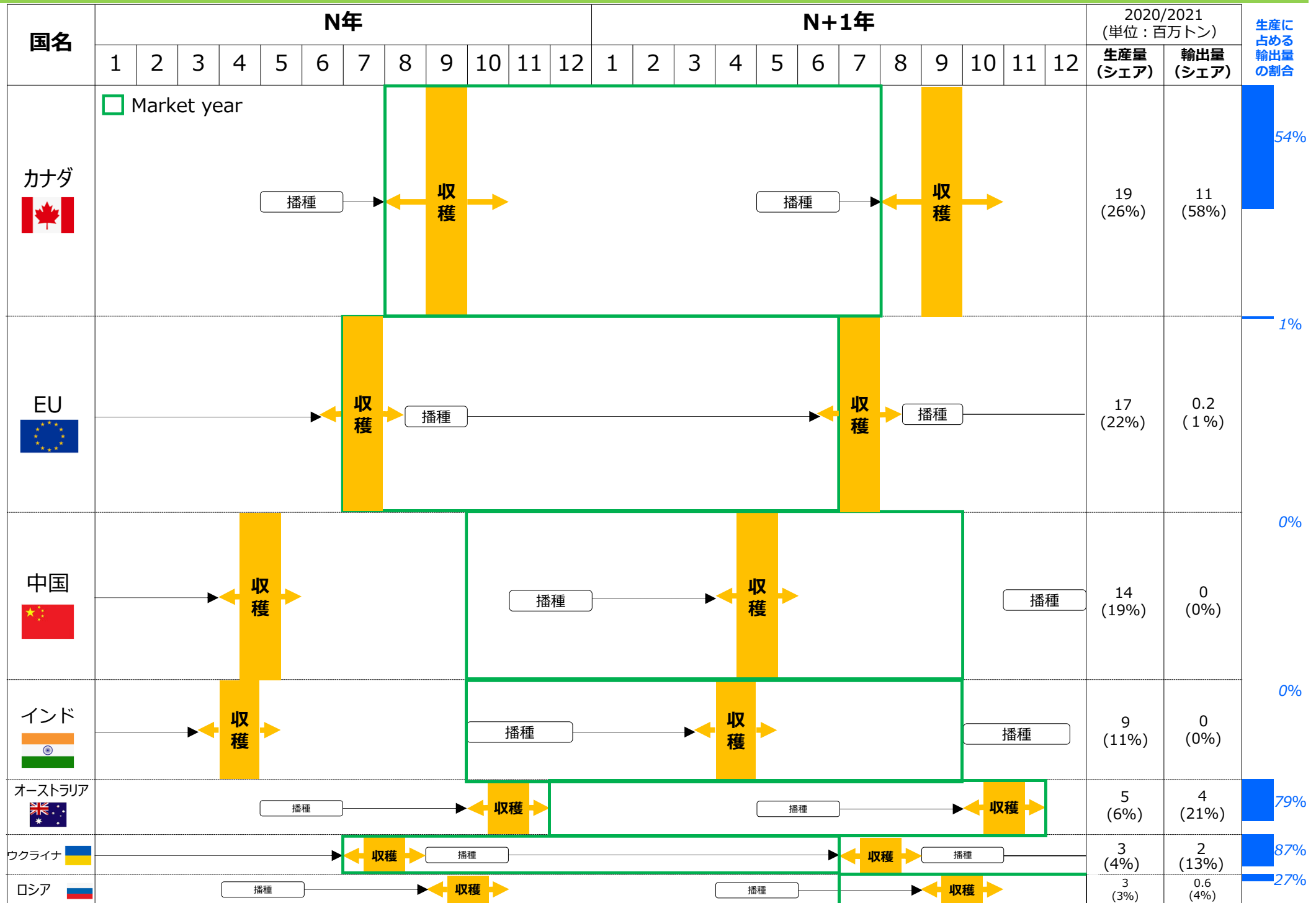
主要生産国のクロップカレンダー(大豆)

※カレンダーの縦幅は世界の生産量に占める各国の割合を示している。



主要生産国のクロープカレンダー(菜種)

※カレンダーの縦幅は世界の生産量に占める各国の割合を示している。



資料: USDA「Crop Calendars」、「PS & D」 注: シェアが3%以上の国のクロープカレンダーを記載している

その他: